

水無瀬の裏手の潜り戸より、忍びやかに走せ出でしは例の瘦せ髪れし五十五六の婦人なり。所々断れたる黒の毛糸の肩掛を、頭よりサツと打ち被りて、寒さうに身を締めつゝ、祇園の公園を指して足早に歩み行きぬ。時しも邸の高塀の山り角より、不意に身を現はしたるは、薄汚なき法被と股引を穿ち、垢染みし手拭もて頬冠りせる怪しの男にて、寒き月影を便りに、例の婦人の跡を、見ぬ隠れに跟け行きぬ。

其五十二

東山の嶺を掠りて、凄くも光りたる片破月は、灰色の雲に掩はれて、今は名残さう曇を收めぬ。一陣の比叡風は、颯と落葉を捲いて、寒き吹雪を送るなりき。夫の髪れたる婦人は、黒の毛糸の肩掛もて、辛くも寒風を凌ぎつゝ、東大谷を抜けて、淋しき公園には出でたるが、其より更に知恩院を横りて、即て白川筋の狭き不潔しき市街には進み出でぬ。

その背後より、絶す見ぬ隠れに跟け行きたる男は注意深く身を潜めて、沈ど其姿を守り居る中、婦人は淋しき小路に走せ入りて、其處に「木賃宿」と記しある、薄汚なき掛行燈の家には進み入れり。

男は軒下に竹立みたるまゝ、耳を澄まして、暫く様子を窺ひ居たるが、十分は過ぎ、俄に頬冠りしたる子拭を取り除け、破れ煤びたる表障子を開けて、寒さうに顔ひながら、俄に腰を屈めてヌツと歩み入りぬ。

「オ、寒いナ、老婦さん一人けへ……お爺さんは何處へ往つたんだ、……大津から荷車の先曳を造つて来たが、イヤ寒い何のつて、逢坂山と来たたら滅法界だ子……今夜は逆も歸られねへから、又厄介にやる積りだ……お爺さんとは、随分古い馴染だからナ……」言ひつゝ、願り向きて竊と見廻せば、例の婦人は上り口の破壁の上に片膝立て、半ば腐けたる素焼の角火鉢を抱へつゝ、五六服立續けに煙草を燻かし居たり、薄暗き古行燈の下にて、襦袢綿を展べ居たる老婆は、羞光ゆげに男を見上げて、

「おまはん、誰やつたナ……年老ると忘れて何もあらん……子息は今日も客を乗せて、大

津へ往つたのやが、泊りなら上りなはれ……」

男は手拭を掴んで、婦人が坐り居る側に上り込み、

「其奴は難有へナ、モシお婦人さん、鳥渡煙草の火を貸してお呉んなさい……」

言ひつゝ古びたる煙草入を探り出して、警りと婦人の顔を見遣りたり。婦人は首肯づいて、例の素焼の火鉢を押し遣りながら、何気なく眺め遣るに薄き結き頭髪は、蓬々と亂れ纏れて、顔は日に焦けたる上に太く垢染み、小皺さへ一面に刻まれたり、身には鼠色に垢れし襦衣と、汚塵塗れとなりし襦袢の法被、股引を穿ちたるが、腰の軟屈みたる、聲の濁りて顔ひ勝なる、年は五十五六にて、如何にも大津街道の先臈とは思はれぬ。婦人は沈と見下して、

「お前さんは、大津のお方かへ……」

男は煙管を横脚へにしたるまゝ、慌て、願り返りて、

「ハイ、乃公ですか、何處と言つて定つた處は無へんで、詰り無宿でござあ……お婦さんは、江戸のお人か……」

「ア、妻は二三日前初めて東京から来たんで……京都の事は少しも知らぬいんだが、此邊は場末と見えて、何だか淋しいことチー」

男は手拭もて、鼻の邊を擦りつゝ、

「ア、斯塞くつちやわ、からつさし人通りは無へだ、其にチ、お婦さん、去年の極月に二條新地で人命犯があつてチ、其からといふ者は、一倍淋しくなつたんでチ……」

「オヤ、人命犯、何だか氣味の悪い話なこと……その殺されたのは、何處の者で何な人でしたかへ」

「乃公も克くは知らねへんだが、何でも江戸のお方で、年は二十五六位、洋服を着た立派な男だつて……」

「エッ、……そ、その脊恰好から人相は、ど、何な様子でしたの……」

言ひつゝ思はず膝を突き進めぬ。男はパツリ〜と嫌かす煙の中より、警りとその顔を眺め遣りて、

「イヤ、爾な事は聞かぬへだ……何だか人の噂に由ると、死骸の左の腕に……黒蛇の刺青

「オッど危ねへ……お婦さん、何したんだ……」
 言ふ中婦人は、「エッ」と身を反らして仰向に倒れんとしぬ。男は慌しく腕を掴んで、
 言ひつゝ、鋭く眼を見張つて、婦人の面を覗き込みぬ。その疲せてけたる面は、看るく
 中に蒼白にありて、今は唇さへ寒きつゝ、呼吸苦しげに齒を切り、ふるくと全身を顫は
 し居たり。

其五十三

婦人は眼を瞑り齒を切りて、全身をふるくと顫はしつゝ、動もすれば仰反りて氣絶せ
 ん状なり。
 男は片手にて肩先を抑へ、片手にて懐中の氣附薬を探り出しながら、惘れて身を反らした
 る老婆に向ひ、

「オイ、お婆さん、水だ……水だ……」
 老婆は速に慌て出して、薬所に駆け込み、腐けたる湯呑茶碗に、冷水を湛へて持ち來りぬ。
 男は婦人を擁へて、手早く薬を咽せ、水を與へつゝ、
 「ホラ、お婦さん、最大丈夫だ……氣を確に……チ、チ、何だつて、爾奇に吃驚しあさる
 んだ……」
 言ひつゝ、眉を擡めて、沈と婦人の様子を打ち守れり。婦人は繼く眼を開きて、唳れし聲を
 顔はし、
 「そ、爾して……その殺された男は……な、何といふ名前かチ……」
 漸く身を起して、瞬もせず男の顔を見詰めぬ。男は軽く首肯づきて、
 「名前は知らねへだが、其はど氣に掛るなら、お前さんに見せる品があるんだ……」
 徐に法被の夾囊を探りて、一葉の寫眞を探り出しながら、婦人の目の前に差しつけぬ。婦
 人は身を屈めて、沈と眺め居たるが、俄に體を反らして、
 「こ、是だ……是に違ひないのだ……」

「イ、エ、爾な積りではないんです……が彼婆々は口巧者だから、欺されまいと思つても、ツイ遣られますよ……叔父さんだつて、此間五十圓取られた癖に……」

「叱ッ……馬鹿ッ……」

慌て、壓へるやうに叱りつけて、俄に微聲になり、

「彼は少し仔細があるんだ……爾な事を苟且にも他人に言つたら、此叔父が承知しないぞッ……」

敬造は横に頷り向きてニヤリと笑ひ、

「ハイ、決して口外致しません……ですが叔父さん、近頃彼家に妙な女が居りますチ……」

義通はパチ／＼と眼を風解さつ、睨むが如く敬造を見詰めた。

其五十四

義通は極めて鋭き眼光にて、沈と敬造の顔を睨みつけ、

がありました、彼好みから察すると爾ですナ、先年は十七八位、チヨイと肥肉の方で顔は愛嬌のある色白の圓ほちや、詞は無論京語りでげせうナ、是が首尾よく當つたら一層のお慰み旦那一杯戴いては如何でせう」なんて吐すんですよ、其口調と來たら、宛つさり落語家なんで……ハ、ハ、ハ、ハ、

義通は愕然として、思はず煙筒を取り落さんとしぬ。去らぬだに鋭き眼を、十二分に見張りて、何を見るときもなく、うろ／＼と天井を見廻はしつ、

「フ、ン、彼奴生意氣な奴だか、……この近所の帳場に居たのを、何だか氣が利いてるの、で抱へたんだ、併し餘り氣が利き過ぎては仕方がないチ……些と言ひ聞かして遣らなければならん……敬造早く庄吉を呼んで來い……」

敬造は小首を傾けつ、即て玄關の方に立ち去れり。義通は兩手を組んで、身動さませず思案に沈めるありき。

五分間許経ちて、敬造は慌しく引返しぬ。座に就くやいな詞を早めて、

「叔父さん、庄吉は居ませんよ、ツイ先刻まで其處の庭先を掃除して居たんですが、急に

く京都へ突走るんだ……乃公も夕方から出掛けるよ、解つたか……ソレ早く、早く、何を猶豫してゐるんだ……」
敬造は吃驚して起ち上り、二三通うろくど慌て廻つて、何かあしに玄關に駆け出したり。義通は其後影を見送つて、ニヤリと冷笑ひぬ。即ち徐に起ち上りて、居間の片隅に在る金庫の側に進みしが、忽ち眼を睜りて、衝立ちたるまゝ、注意深く室内を見廻し居たり。

其五十五

大阪會根崎なる梅田町にて、三問許の間口に、竹垣を結び繞らし、「岸澤光枝」の標札を掲げて、静に小綺麗と構へたるは、夫芳子が叔母の宅なり。その猿戸をガラリと引開けて、無遠慮に進み入りしは、三十許の支那人にて、肩先に蠶物包を擔げしまゝ、盧森々々と表の間を見廻はし、
「御免なさい……お主婦さん、支那親子支那縮緬澤山麻いあります……」

猿戸の響は、奥の間より駆け出したる光枝は、其を見て俄に眉を蹙り、急がしげに片手を掉りつゝ、

「イエ、爾が者宜しい……妾許要りません……」

支那人は更に頓着せず、蠶物包を投げ出して、徐に上り口に腰を掛け、

「併し、お主婦さん、これ澤山、澤山麻い……今戦争ありませう、支那物大變高い……支那縮緬、一反八九圓あります……私、代物大變麻い、昨日七八圓買しました、私今日金銭調

へねばなりません八圓の品、三圓買ります、貴女これ買うて置く、直に友達賣る、五圓六圓儲けること、私請合あります……代物見る宜しい……」

言ひつゝ、手早く風呂敷包を解きて、中より四五反の支那縮緬と採り出し、光枝が膝元に突きつけぬ。怒に掛けては、一點の脱目なき光枝は、ギロリと眼を光らして、見るとはか

しに沈と膝元を見遣るに、地合は普通に勝れて宜く、如何にも廉價に思はるゝに、識らず知らず手に採り上げて、裏表を繰り返しつゝ、二三分も眺め居たるが、即ち頰の小皺に、微

笑の波を打ち寄せて、

207

「是が三圓ですかい、些どお高いやうだす……二圓、爾さす、二圓五十錢位なら、二三反貫つても宜いんだが……」

支那人は、故と飛び上る爲して、頬を脹らし、

「オ、二圓五十錢……それお主婦さん、餘り殺生あります……私金銭詰まる、それ故見切るあります……三圓、少しも掛直ありません……」

光枝もツンと済して、

「其だど、最宜しいよ、折角だが子、外へ向けてお呉れ……」

支那人は俄に笑ひを含みて、機嫌を迎ふる如く、光枝の顔を見上げ、

「子、お主婦さん、二圓七十錢、折合ひ宜しいあります……私澤山損する……併し、是から度々来る、華主殖るる、それ楽しみあります……」

光枝も思はず微笑みて、

「貴君、商巧手だね、では仕方がありません、二圓七十錢で折合つて、三反だけ貫つて置きますよ……實は子、妾許には要らんのだが、他へ賣つて少しでも口銭が欲しいんで……」

是で儲かつたら、度々賣つて貫ひますよ……何程になりますか子、エーと八圓十錢ですかへ、十錢ちんて者だ子、端錢だけ負けて置くんたよ……」

言ひ掛けて起ち上らんとする時、忽ちガク／＼と腕車の響聞ひて、表に駆けつけたる男あり、急遽しげに腕車を飛び降りて、猿戸の中に駆け入りしが、偶然支那人を見て躊躇するを、光枝は目早くも眺めて。

「オヤ、敬造さんですかい、大變お急ぎの様です子、何か急用でもお在んなさるんで……」敬造は庭口に衝立ちたるまゝ、鹿々つかしく光枝を見上げて、

「大急ぎ、大急ぎ、例の芳子さんの事で直に京都に駆けつけるんです……今度は何しても伴れ出す積りだから、都合に由つては、貴女に上京して貰はねばあらんかも知れん、無論貴女は證據人に立つて下さるだらう子……鳥渡その事を言つて置きたいんで……」

「アラ、爾ですか子、大變急な事になつたんですナ……ハイ／＼宜うございますども、妾が屹度證據人にありますよ……其代り此間頼んだお金銭は……」

「ア、其は勿論宜しいです……では直に出掛けますよ……」

言ひつゝ、慌て、飛び出して、驪りと腕車に乗り、其まゝ一散に駆け出しぬ。光枝は其の後影を見送りて、思はず「ボ、」と打笑ひしが、偶然支那人を顧り返りて、眼を圓くし、

「オヤ、妾は勘定を忘れて居た……」

言ひ掛けて奥の間に走せ入れり。支那人は首を突き出して、奥の様子を見廻し居たるが、即て庭先の下駄箱に眼をつけて、沈と其中を窺きし時、光枝は再び出て来て、

「ハイ、確に入圓渡しますよ……」

「難有う……」

支那人は其まゝ懐袋に捻ぢ込みつゝ、端物包を振り擔げて、足早に立ち出でしが、二三間行き過ぎるやいな、一散に駆け出して、妾は瞬く中に見ぬすなれり。

其五十六

光枝は壺所火鉢の側に坐りて、先刻買ひ求めたる支那縮緬を、膝元に併べ置き、小首を傾

けて嬉しげに眺め居たり。即ち長羅宇の煙管を探りて、煙草を煙かしつゝ、

「眞個にチー、妾は大變幸福者だよ、義通さんからはドシ／＼お禮を取る、敬造さんから、何とか角とか言つて仕送らせる、見ず知らずの支那人まで、斯な物を擔ぎ込んで儲けさせるんだもの、何したつてお金銭が溜らないでは仕様がないうワ……この月末には、エーと幾干はと預けやうか知ら……」

覺ゆる莞爾として、額に寄する波の、崩れんほどに微笑みつゝ、日は疾くに暮れ果て、家はおぼろに薄暗くなりしをも知らざりき。

偶然心づきて、俄に起ち上り、洋燈を探り來りて手早く火を點し、時、尋常からぬ足音の、ハタハタと表に響きて、猿戸をがらりと引開けるやいな、突然庭口に飛び込みたる人あり。光枝は吃驚して、表の間へ駆け出す中、

「お主婦さん、大變……大變あります……私、七八する、お上知れる、今探偵追驅けるあります……澤山、澤山お禮する、お主婦さん私隠す宜しいこれ拜ひあります……」

言ひつゝ、慌て、庭より駆け上り、顔色更へて、きよろ／＼外面を見廻し居るは、疑に端物

を持ち來りし彼支那人なり。光枝は沈と打ち守りて、

「貴君、屹度お禮しますか……エ、十圓、宜しいナ……早く、早く奥の間へ……」

「お主婦さん、難有う……」

支那人は狼狽へ騒ぎて、輾が如く中の間を駆け抜け、奥座敷に飛び込んで、彼方此方をうろくど走せ廻りしが、再び中の間へ取つて返して、押入の中に潜り込み、其處にある長櫃の蓋を取り除けて、其まゝ飛び込ましたりしが、俄に駆け出して、葦所より走り元まで、さよろくバタバタと騒ぎ廻り、其揚句には、中の間より二階へ登るべき段梯子を臨んで、霧直に駆け上らんとしたるを、光枝は見て喫驚し、

「ソラ、お前さん……そ、そ、其二階へ上つては……」

矢庭に引き留めんとしたれど、支那人は例の慌てし聲にて、

「宜しい……宜しい……十圓あります、十圓あります……」

言ひつゝとんくと段梯子を駆け上りて、先薄暗き表の間に走せ入りしが、忽ち振り返りて、奥の間の襖の隙より、燈火の影の漏るゝを見るより、疾風の如く駆け行きて、突然そ

の襖をサツと開きたり、その瞬間中より「アッ」と叫びたる女の聲、支那人も身を反らして、少時は進み兼ねたり、

階下の光枝は、思はず「ア」を聲を擧げて、續いて駆け上らんとしたる時、再び表に走せ入りし人あり、

「御免、御免……御主人は御在宅か……僕は刑事調査だが、犯人捜査の爲に出張した……至急、大至急御面會したい……」

鋭く呼び立てられて、光枝はうろくと立ち騒ぎ居たり。其間に探偵は店の間に上りて、

「外ではさいます、七八の現場を見つけた支那人が、確にお宅へ逃げ込んだです、今現に二階に駆け上つたのを見つけた、取逃してはなりませんから、烏渡失禮します」

言ひ畢らぬ間に、早くも段梯子を傳うて二階に上りぬ。時しも例の支那人は、奥の間の正面に坐りて、其前に十七八の娘を引据え何事か潜ひやかに話し居たり。

込に置きて、白の毛織の膝掛を纏ひたり。門を入りて真正面の大玄關の前に、ガタリと靴を下し、時、硝子戸の中より飛び出でしは、年若き氣の利きたる給仕にて、衝々と義通の前に進み出で、姿勢正しく頭を下げぬ。

義通は葉巻のマニラ煙草を燻べながら、優々と腕車を降りて、軽く黙もて指揮しぬ。給仕は早くも心得て、鞆と膝掛と洋杖とを携へ、先に立つて硝子戸の中に案内しつゝ、直ちに見附の書記の前に伴ひ行きて、宿泊簿に、記名を求めたり。義通は鉛筆を採りて、スラ／＼と記し畢りし後、應揚に給仕を顧り返りて、

「室は三階よりか、二階が宜からう……成るべく静な處を選んで貰ひたい……」

給仕は無言のまゝ頭を下げて、段梯子を導びき上れり。其より真直に右手の廊下を辿りて、南手東側の十號室まで進みし時、給仕は俄に立ち留りて室の扉をガタリと引き開け、片手を差し延べて會釋したり、義通は願向もせずツイと進み入りて、例の葉巻の煙を渦巻かせつゝ、室内を歩み居りしが、即て硝子窓より高瀬川を見下して、漸くに微笑を漏らし、

「ア、此處で宜しい……晝は屹度東山も見ゆるだらうチ」

言ひつゝ、寢室の横手なる安樂椅子へ、投げけるが如く身を寄せ掛けぬ。給仕は首肯いて、鞆其他を室の片隅に納ひ置き、義通が前に直立して、

「アノ、暖室爐を焚きませうか……」

義通は徐に頭を掉りて、

「イヤ、暖室爐は逆上せて困る……何かチ、珈琲は出来やうかチ……」

「ハイ、直に調べます」

言ひつゝ、頭を下げて、足早に立ち去れり。義通は安樂椅子に凭り掛りしまゝ、暫らく眼を閉ぢて考へ居たるが、忽ち勃然と身を起して、鉛筆と紙とを採り出し、圓卓子の上にて、何か切に認め居たり。

五分間許り過ぎて、漸く一封の手紙は書き成されぬ、其と共に給仕は珈琲を携へて、再び出で来れり、義通は顧り返りて、その手紙を差しつけ、

「ア、御苦勞ぢやつた、是をチ、急に郵便へ出して貰ひたい……」

給仕は受取りて、其まゝ室外に立ち出で、響高く扉を閉め切れり。即て電燈の光に手紙の

宛名を眺め返りて、

「市内真葛原水無瀬邸にて妙子様、京都ホテルY、S……」

口の中にて讀み返しつゝ、思はず十號室を顧り返りて莞爾と微笑みぬ。

其五十八

夜は更けて十一時過とはなれり。廣き洋宿の中はしんくど寂れ返りて、電燈の光は青白く閃々たり、折々階下の廊下を歩む靴音の、けたましく反響して、迹は一層物凄く感ぜらるゝなり。

時しも、二階の廊下の小暗き片隅にて、呼吸を殺し身を潜めしは、遂に義通を迎へたる給仕あり。時々電燈の影に半身を現はしては、密に四邊を見廻はし居たるが、即て身を屈め足を翹て、恰も幽霊の迷ひ出でし如く、ふわくと廊下を辿りて、義通が閉ぢ籠れる、夫十號室の前には忍び寄りぬ。

忍び寄りて、入口の扉にびたりと體を着け、一心に耳を澄して、室内の様子を窺ひ居たり。義通は尙睡眠に就かざるにや、折々室を歩み廻る音、又は靴を開く音など、微かに漏れ聞ゆなり。

十分程経ちて二三度咳拂ひしつゝ、俄に入口に進み寄る足音聞ゆ給仕は軽く飛び退きて、其隣の空室の、扉の開きあるを幸ひ、矢庭に其中に進み入りて、掻き消す如く姿を隠せり。其と共に十號室の扉はがたりと開かれて、丈高き肥々たる義通の身體は、眞直と廊下に現はれしが衝立ちたるまゝ、左右を見廻はして、即て靴音高く北方を指して歩み行けり。

片手に手燭を携へたれば、多分便所に赴きしなるべし。其と摩違ひに、隣の空室より、再び幽霊の如く現はれしは給仕なり。今や義通が開け放したる扉の陰に、素早く身を潜めて、遙かの廊下に消え行く義通の後影を見送りしが、忽ち電光の如く身を躍らして、十號室に飛び入れり。

室内に躍り込むやいな、鋭き眼を光らして、八方を見廻はし、が、早くも片隅ある靴に眼をつけ、衝々と進み寄りて、電燈の下に携へ來り、兩手を掛けて慌しく開けんとしたるが、

緊しく銃を下しわれれば開くべくもあらず、「チエツ」と舌打して起ち上り、入口まで駆け出して、廊下を見廻はしては、舊の所に走せ戻り、再び飛び出しては、引返して、忙しげに體を揺りながら、卓子の小抽斗、又は壁に掛けある外套の夾襖など捜し居たるが、果は落膽して電燈を見上げ空しく腕組して太息を漏らし居たり。即て再び氣を勵ましめながら、何となく力あげに、寢臺の夜具の下を探り居りしが、忽ちがちりと指先に觸れし者あり、其まゝ掴んで引き出し、電燈の光に眺め居たるが、不意に躍り上りて、

「占めた……是だ、是だ、到頭鍵を捜し出したぞ……」

覺せず口走りて靴を引寄せ、その鍵を探りて開きしが、見れば意外にも、十圓紙幣の百枚束、大凡そ二十許、公債證書、株券など百枚餘、他に寶石入の指環、腕環、純金の懐中時計など、燦爛と電燈に映じて、傲り顔に輝き居たり。給仕はそれには目を呉れず、兩手を差し入れて、ぐる／＼と中を掻き捜し居たるが、遂に一挺の小短銃を探り當て、莞爾と微笑みつゝ探り出し。高く頭上に懸して眺め上げたり。

その短銃は六連發にて、彈丸は六箇ども新たに装められたり。給仕は一筒宛彈丸を抜き取

りて、六箇目に指を掛けしとき、忽ち廊下に當りて、義通が靴音は響きたり。喫驚して残りし彈丸を取り出すやいな、短銃を袖に投げ込み、バチリと締め切りて、舊の片隅に押し遣り、片手の鍵は寢臺の夜具の下に突込みしが、その刹那に、義通は早くも進みて、入口の扉の側には来れり。

給仕はサツと身を引きて、壁に掛けたる外套の影に潜み入りぬ。義通は肩を揺つてヌツと室内に入り来りつゝ、ガチャリと扉を閉め切りて、内部より堅く銃を下しぬ。給仕は、今や室内に閉籠られて、全く通路を断たれしありき。

義通は願り返りて、四邊を見廻はし居たるが、俄に「ア、寒……」と身顫ひして、街々ど外套の側に寄り、襟の邊に兩手を掛けるやいな、サツと引き取りて服の上に被りたり。その瞬間、給仕は蹶りと身を交はして、較く寢臺の下に潜り込み、ヒタリと床に平伏して、沈み呼吸を殺し居たり。義通は外套を被ると共に「オ、草臥れた……」と呟きて帳りと寢臺の上に横りぬ。

其五十九

その翌日午前十時過、東丸太町なる狹山鑿三が宅へ、腕車を轆らして駆けつけしは、花岡

取次の書生に導かれて、六疊の客間に通りしが、其より十分許過ぎて、狹山は眼さうに眼

を擦りつゝ、漸う客間に出で来りぬ。
「何もお埃たせ申して済まなかつた、今まで夜具の裡に滑り込んで居たので……」

「エ、今まで御寝なつてお在だつたか 探偵といふ者は優長な職務と見ゆる子……、朝寝

と言つても隙隙があるよ、ハッハ、ハ、ハ、」
「處が僕のは寝るのではない、夜具を被つて、沈と探偵方針を考へてるのだ……といふぞ

道理らしいが、實は前宵捜査用の爲にまんぢりとも寝なかつたので、今その償を取つてる

のだ、ハ、ハ、ハ、時に克くお訪ね下すつた、折角お宅へ伺はうと思つて居たんで……」
「なるほど爾だつたか、乃で捜査は益進行したらうな、犯人は略分つたか子……」

「イヤ、更に分らない子……證據物件は大分集つたよ……が何して、敵手が敵手だから、

容易に尻尾を出さないのだ、君は其後何か新事實を發見したかへ」
「新事實處か益その端緒を失つて來たのだ……君が何時か列擧した四人の嫌疑者につい

て、晝夜思案に思案を凝らして見たが、僕には何しても見留が附かない、成るほど證據物

件から推して見ると、最疑はしいのは芳子嬢、妙子嬢で、公平に言つたら、雙方も同じ

やうに嫌疑の材料は具つて居るのだ……、併し君、此處の點を克く聞き給へよ、高等の教

育を受けた、言語、容貌、舉動まで立派な令嬢の資格を具へた、加之身分ある華族のか嬢

さまが、兇惡無比な人命犯なんて犯しさうな筈がないではないかへ……あるほど、世間の

實例に由ると、非常な美人の中に非常な毒婦もある……併しだ、顔は心の鏡ではあいかへ、如何に容色は美しくいしにしろ、心に毒氣が充満て居たら、必らずその容貌にサ、一點の曇を帯びなければならん筈だ、君試みに芳子嬢、妙子嬢に會つて見給へ、其容貌は如何に美はしいか、如何に無邪氣か、如何に優しいか、憐らしい毒氣をんで、卵の毛の先で突いた程も見當らぬいよ……乃で僕は宣言する、縦ひ天地は覆つても、この兩嬢が人命犯なんて……」

「最解つた、解つた、宜しい、其で十分だよ……」

狭山は急に兩手を掉つて押し止め、即ち莞爾と打ち笑みて、

「君の美人信仰論には驚くよ、爾な議論を擡ぎ出すと、僕も勢ひ駁したくもなるが、惜いかなだ、今日は時附が許さぬのだ……乃で今言つた證據物件に就いて、差當り君に示して置きたい者がある、鳥渡埃つて呉れ給へ」

言ひつゝ、起ち上りて、奥の間に入りしが、程なく出で來りて、一箇の小さき彈丸を素の手に投げ出し、

「即ち是だ、この彈丸は、判檢事が現場へ出張した時、裁判醫が男爵の創口から採り出したので、非常に有力な證據物件だよ……ホヲ見給へ、この小豆程の小さい彈丸は、是まで闇夜の中に葬られて居た、二條新地と眞葛原との極めて秘密を二大事件を照して居るので、實に僕に取つては數萬圓の金剛石よりも貴い品なんだ……後日の参考の爲に示して置くよ……」

言ひ畢りて町重に布裂に包み、桐の小さき箱に納ひつゝ、

「處で、僕が見込では、今夜眞葛原で大騒ぎが起る筈なんだ、僕はこの機會を利用して、仰るか反るかの一六勝負を試みる積りだが、君も今までの行掛りとして、一臂の力を貸して呉れ給へ……勿論警察へは夫々照會して、既に八方へ非常線を張つて居るが、今夜は一人でも加勢の多い方が宜しいのだ……といふのは或は犯人が苦し紛れに逃げ出すかも知れぬ、イヤ逃げるのは宜いが、或は自殺を謀るかも知れぬ、若爾あつた日には、折角苦心した事が盡なしに在る譯だ、で君は二三の刑事調査と共に、夕刻から水無瀬の裏手を張番して貰ひたい、今夜は署長、警部、調査の面々が總出の幕といふんだ……君見物かてら

京には、僕の乳母が住んで居りますから、其處へお隠し申したら、何したつて知れつては
ないんです……エ、奈何です、早く逃げやうではありませんか、芳子さん、貴嬢爾なに猶
豫して居ても探偵が踏込んだら奈何するお積りあんです……」
無上に氣を熬りて、四邊を見廻はしつゝ、急ぎ立てぬ、芳子は端然として坐りしまゝ、頬の
亂れ毛を掻き上げんともせず、臉を閉ぢて黙し居たり、敬造は忙はしく詞を繼ぎて、
「何も困るぢやアありませんか、貴嬢は僕の詞を信じないんですナ、探偵が眼を光らして
貴嬢を狙つてるのを、虚説だと思つてるんですナ……貴嬢は今日の新聞を御覽でしたかへ
「奇怪なる人命犯」といふ冒頭で、名前こそ明瞭記してはないでしたが、舊二條新地の宿
屋へ、怪しな男を伴れ込んだのは、貴嬢に相違ない様子だと、わり／＼記してありました
よ、既に世間でも爾等噂が立つて居るに、貴嬢は安閑として細目に掛るお積りなんですか
……」
言ひ畢らぬ中、芳子はサツと顔色更へて、伏ひさながら身を顛はしぬ。即て辛くも面を
上げて、敬造の方に向き直り、愛らしき眼より、ハラ／＼と涙を流して、

「最……最致し方もございません……、愈々の罪と定れば、繩目に掛るのが當然と存じ
ますので……、今貴郎の御親切に甘へて、東京へ逃げましても所詮……所詮身を免れる事
は出来まいと思ひます……ですから、今にも其筋から見ぬましたら妾は何にも申しません、
此ま、警察へ……警察へ引かれる決心でございしますので……唯名残惜しいのは國許の阿母さ
んでございます、此間御葬式の時にお越しなすつてから、一層お懐かしう存じますので、
辛と四五日前お別れ申したのですが、今一度、警察に引かれる前お目に掛りたいと、存じ
ます……」
言ひつゝ、伏し倒れて、哀れに泣き咽ひぬ。敬造は熱見下しきながら、莞爾と首肯づきて、
「エ、阿母さんにお會ひ申したいつて……では東京でなくつても宜しいです、直に國許へ
お伴れ申しませう……ナ、芳子さん、早くお仕度を爲さ……」

其六十一

芳子は涙を拭いて、思はず膝を押し進め、

「では國許へ……アノ阿母さん許へ、お伴れなすつて下さいますの……」
敬造は切に首肯づいて、

「ハイ、僕が誓つてお會せ申します……詰り貴嬢は、非常に危険な場合に臨んで被在つしやるから一時も早くお助け申したいんです、僕は以前の約束を繰り返して、貴嬢をお責め申す譯ではありませぬよ、其は第二の話として、差當り安全な増所へお伴れ申したいんで……ですから僕の詞を疑はしないで、早くお準備をなすつては奈何です、今にも探偵が追入つて來たら、取返しが付きませぬ……」

芳子は打ち透れて、太息のみ漏らし居たるが、漸う思ひ定めたる面色にて、亂れし髪を掻き上げながら、

「イ、エ、準備と申しましたも、妾は此ま參つて、一度お目に掛つたら、餘所ながらお暇乞を致して、直に歸つて來る積りでござります……唯郎の者が案じてはありませぬから、妙子さんへ鳥渡そのことを書き残して置きたいと存じますので……」

言ひつゝ再び太息を漏らし居たるが、即て硯を引寄せ、巻紙を探り上げ、何事かヌナクと書き認めぬ。敬造は窺ひ見て笑ひを含み、

「ア、其で宜しいです、爾してお置きなすつたら何方もお案じなさる事はありませぬ……では直に參りませう、サ早くお起ちなすつて……」

手を探らん許に急ぎ立てぬ。芳子は萎れながらに起ち上りて、太息と共に四邊を見廻はしが、徐に洋燈の側に立ち寄りて、燈火を消さんとしたるを、敬造は慌て、押し留めて、
「イヤ燈火を消しては、却つて人に氣取れます、其ま、捨て置くが宜しいので……」
言ふ間に密に障子を開けて、庭下駄を整然と取揃へつゝ、

「サ、是をお穿きなさう、邸内を出ましたら、直に女下駄を買つて差上げます……僕は臆足と出掛けますよ……」

芳子は居間を顧り返りて、幾度か涙を拭ひつゝ、漸う庭下駄を穿ちて、裏庭には立ち出でぬ。看れば断續なる雲の裡に、鎌に似たる新月は磨き澄されて、四邊は條縹と寂れに寂れたり。思はず首を縮め身を額はして、敬造に引立てられしま、辛くも裏門より潜り出で

たるが、忽ち立ち留りて、邸宅を見廻はし、名残惜げに涙に咽びぬ。

敬造は氣を熬りて願り返り、

「貴嬢、爾なにお氣が弱くつては不可ませんよ、誰かに見つけられたら、阿母さんに會ふ事は出来ないではりませんか……」

敬造は現はれぬ。無理に引立て、西大谷の方へ進みし時、不意に樹木の陰より、三人の

敬造は喫驚りして立ち留り、芳子はハッと透巡りして、ふるくと體を顫はし居たり。其間に三人は衝々と進み寄りて、敬造の前に立ち塞がり、

「何人だ、夜中この邸内を逃亡するのは……」
敬造は故と安堵さたる體にて、

「イヤ逃亡するのではない……少し急用があつて他へ參るんで……一體お前方は誰だ……」
「僕等は刑事調査である……官命を帯びて非常線を取つてるので、唯今此處を通行する事は許さず……」

「エ、幾ら官命だつて、爾な不道理な事があるもんか、僕は通つて見せる……」

言ひつゝ再び芳子を引立て、無理にも進み行かんとするを、刑事調査は遮きり留めて、突然その肩先を突き飛ばしぬ、敬造は身を退るよと見ゆしが、俄に「ナニッ」と叫びて、懐中より短刀を採り出し、逆手に持つて振り廻したり、

「官命に抵抗するか、已むを得ない……」

刑事調査は、サッと左右に飛び退きしが、即ち掛聲鋭く敬造に組みつきぬ。芳子は餘りの恐ろしさに、思はず「アレー」と聲を擧げて、其の場に伏き倒れんとしたるを、不意に後方より抱き留めし者あり。芳子は益々喫驚りして、願返りしとき、

「貴嬢、奈何なすつたんです……今お逃げなさるなんて、貴嬢のお爲に非常に不利益ですよ……お氣を静になさい、私は花岡薫です……」

其六十二

芳子が敬造に鞠められて、居間より忍び出る前、妙子は力なげに衾の上に起き直りて、暗き火影の下に、聲を飲んで滑々と泣き居たるあり。

看れば、花を歎く美はしき顔には、何となく髪を帯びて、髪はハツ／＼と亂れ掛れり、白く透き徹りし頬は較殺けて、幾條とちく涙の痕を留め、臉は逆上を見せ、薄桃色に霞されぬ。熱涙に曇れる眼を織く開きて、沈と燈火を見詰めては、襟元深く頬を埋めて、身を頭はしつゝ泣き入る體、奈何に傷はしくも哀れなるかよ。百千の苦痛は心を責て、得も言はれぬ悲哀には沈みしならぬ。

折から 廊下に足音響きて、徐に障子を引開けしは、石使の女なり、訝かしげに妙子を見上げて、

「お嬢さま、お加減は奈何でございますか……お悪いのではございませんかへ……大變お顔色が……」

妙子は願向もせず、煩殺さうに頭を掉りて、

「イ、エ、何もありません……」

「爾でござりますか……若お悪いやうでしたら、何時きりともお呼びなすつて……アノ魔今このお方がお越しなさいまして……御病氣と申しましたが、是非お嬢さまにお會ひ申さねばならぬと仰しやりますので……」

言ひつゝ手に持ちし名刺を差し出しぬ。妙子は漸う願り返りて、見るどはなしに見遣る眼に「櫻田義通」と記せる名刺を認めて、ハツと身顛ひしつゝ打驚き、蒼白になりし顔を反

向けて、苦しげに太息を漏らし、が、即て涙に濡りし聲にて、
「お嫉らなすつて被在つしやるか、では仕様がなす、此方へ御案内申してお呉れ……」
下婢は畏りて、玄關の方へ立ち去りぬ。程なく此居間に現はれしは、櫻田義通なりき。

義通は鋭き眼光にて、先きよろ／＼と室内を見廻し、即て苦り切りて、妙子が前に坐りつ

「ハ、ハ、御病氣と見るナ……洋宿から手紙を差上げたに、何故返事を呉れおいた……
……豈夫手紙も書けない程の病氣でもあるまいナ、巴むを得んから、今夜は此方から面會に上つたのだ……」

妙子は何気なき體にて、笑ひを含み

「アレ、叔父さん、爾いふ譯ではないんです……折角叔父さんから、御用事があると云つてお寄越しなすつたから、直にも洋宿へ上らうと思つたんですが、少し許り風邪を冒さまして、宜くもつたら上らうと思つてる間に、ツイ延引になりましたの……お返事を上げおいつて、叔父さん、爾な譯ではございませぬよ……爾して、アノ御用事は何な事でございますチ」

義通は較面を和らげて、軽く首肯づき

「イヤ用事と言つて、太した事はないのサ、實は差違つて金子が入用なので、少し許り融通して貰ひたい……」

妙子は俯きて眉を蹙め

「お金でござりますの……妾だつて相續人といふ名前許りで、尙後見も定らない程ですから、お金銭さんか少しも自由になりませぬので……アノ何程でござりますチ」
義通は巻煙草を輪に吹きて、天井を見上げ

「爾さチ、餘り大金ではお前も困るだらうから、先差當つて、鳥渡五六萬圓は借りたいのだ」

言ひ畢らぬ中、妙子はエツと眼を見張りて、惘れながらに義通を見遣り、返答とても爲し得ざりし。

義通は其顔を瞥りと眺めて、徐に膝頭を膝り寄せ

「妙子、お前奈何したんだ、何故爾なに驚くのだ、エ些ども惘れる事はあからうぢやアないか……克つく考がへて御覽、この水無瀬の財産を山分とは最初からの約束ではないかへ、何は安く踏み倒しても、二十萬は下らぬ財産だよ、言はゞ黙つて居ても、十萬圓が者はブラ下つてるのだ、其を五六萬に負けて置くのは、叔父姪の情ではあるまいか……出されなければ最宜いよ、半錢一厘も貰はないよ、お前から人情を缺いで来れば、最叔父だつて勘忍は出来ぬ、お前の秘密は一から十まで知り抜いてるんだから、其筋へ訴へたら、何の造作もない事だ……ヘン證據なんて騒ぐには及ばないよ現にお前の左の腕には……」
言ひ掛るを、妙子は狂氣の如くなりて押し止めつ義通が膝に取凭りて

其六十三

義通は脱しが如く妙子を見下して、

「ナニ、埃てと言ふのか……では今言つた金銭は調べて呉れるのだナ、五萬圓は一厘缺けても承知しないぞ……其もサ、手間取つては間に合はないよ、今夜の中に耳を揃へて受取りたいんだ……」

妙子は急喫驚りして、聲を頭はしつゝ、

「叔父さん、其れは餘り御無理ではございませんかへ、口でこそ五萬圓ですが、妾に取つては却々の大金ですよ、今夜の中に拵せなんて爾な事が出来やう筈がないではありませんかへ……」

義通は鋭く錆たる聲を、故と呻るやうに低めて、

「ム、出来ないと云ふのだナ……確に渡されかいと言ふんだナ……最宜いよ、最受取らぬいよ……乃公は子、今夜の中に遠方へ突走る積りなんだ明日明後日まで延ばす程なら、爾サ、捻ぢ切つても、美事十萬圓は取つて見せるよ……畢竟大急ぎだから、五萬圓に負けず遣つたんだ……爾言つて了へば、最仕様がよい、此叔父を馬鹿にした面當に、今から警察へ飛び込んで、その左の腕の刺青を……」

「アツ、叔父さん……情願……情願、お埃ちなすつて……渡します、屹度今夜の中に、耳を揃へてお渡し申します……」

言ひ畢るやいな、崖破と突伏して、身を頭はしつゝ泣き沈みぬ、義通は頭を突き出して、徐に下頤を摩りながら、

「フ、ン、爾いへば受取つて置かうか子……何だ何が悲しいんだ、五萬圓の金銭が其れを惜いのか……たつた其しきの金銭で、大事を身命を買つたと思へば、餘り高くもあるまいぢやアないか、ハツ、ハ、ハ、ハ、時に相談が極つたら、早く出して貰はうか子、都合に由れば公債證書でも構はない、サ妙子、幾ら夜が長いと言つても、焦熱されちやア困るよ」

妙子は勃然と起き上りしが、向も溢るゝ涙を堰き止め兼ねて、膝に置きし兩手の指をふるゝと顔はしつゝ、

「ハイ……直さに持つて参ります……この居間で鳥渡の間へ埃ち遊ばして……若現金が不足でしたら、公儀なり、株券あり……何なりとも差上げます……」

言ひ畢りて徐に起ち上り、首肯づく義通を顧り返りて、力なげに居間を立ち出でしが、其より顔ふ足許を踏み占めて、辛くも廊下を辿りつゝ、即ち芳子が居間には進み入りぬ。

進み入りて、薄暗き燈火の光に、室内を見廻はしては、芳子が姿の見ぬを訝かりて、切に小首を傾け居たるが、偶然机の上に、手紙の載せあるを見遣りて、驚愕の眼を見張りしを、急ぎ探り上げて讀み下すに、

「妾の言ふに言はれぬ事情在し、いつ其筋へ召し捕られぬやも計り難く、其前に一度母さまへ御目に掛りたくいま、敬造さまに伴はれて、今夜國許へ罷り越し申し、二三日の中には必らず歸京仕るべく、詳しきことは御目もじの上申し述べ置くわらゝ」と認めありたり。妙子は看るゝ中に熱涙溢れて果は動と伏むさ倒れ、聲を忍び涙を飲んで、啜り泣に泣き咽びしあり。

漸ら起き直りて、はより落つる涙を拭ひながら、

「芳子さん……と、情願御堪忍遊ばして……悉皆妾の罪でございます……この、此申譯は……屹度今に致します……」

言ひ掛けて、再び滑々と泣き居たるが、忽ち氣を勵まして、机の上に有合はし、巻紙を探り上げ、傍なる硯を引寄せ、即ち何事か認め初めぬ。

筆持つ手先はワナノと顔へて、水盞の迹哀れに悲しく、俄に涙の堰き上げ来て、忍び音に咽び入りては、再び心を取り直して、辛くも筆を走らししが、五分間許り経ちて、遂に一封の書面を認めたり、其と共に身を投げ伏して、懊惱の軋びつゝ涙の限り泣きに泣けり。

時しも次の間の柱時計の、十時を打ちしに驚かされ、不意に起ち上りて、涙に見分かぬ眼を見張りらるゝと左右を見廻はし、が、其ま、踰眼めく足を踏み占め、踏み占め、呼吸を殺して廊下に歩み出でぬ。時しも月の光は雲間に閉ぢられて、サツと掃ふ一陣の嵐は、

肌沁みて冷かあり。

其六十四

冷やかなる風梢を鳴らし、星の光り小さく見ゆる夜は益々凄み深ゆ。剪裁の片隅にて、こ
 んもり繁る植込の陰に、古き筈燕したる井筒ありて、今やその側に歩み寄りしは、紅涙に
 間なき妙子なりき妙子は歩み寄りて井筒の中を窺き居たるが、忽ち身を顛はして飛び退り、
 其まゝ惘然として佇立りやがて漸ら顧り返りて、星明りに邸内を見廻はし、ふるく
 と頭を顛はしては、名残惜げに眺め遣りしが、果は兩手を顔に押し當て、哀れに萎れ伏さ
 たるまゝ、聲を忍んで、滑々と泣き沈みぬ。

五分許過ぎて、不意に面を上げ、沈と空を仰ぎて合掌しつゝ、祈禱を捧ぐる様子なりしが、
 よろよろと進み出て、雙の手を井筒に掛くるやいな、翻りと體を拵つて、危ふく入水せん
 とはしぬ。

その一刹那、忽ち植込の陰より飛び出でし人あり素早く駆け寄りて、妙子が帯を掴み、

「アツ、危ない……妙子さん、貴嬢は飛んだ事を……」
 妙子は喫驚りして顧り返りつゝ、星明りに透し眺め居たるが、俄に身を反らして、聲を擧
 げ、

「あれ、貴方は狭山さんではございせんか……」
 男は確乎と妙子を引執へて、徐にその顔を眺め、

「ハイ、狭山鏗三です……斯き間違があつてはならぬから、貴嬢方を保護するため、宵か
 らお邸へ出張して居ますので……」

「エツ、宵から……あ、貴方が……」

言ひ掛けてはたりと倒れしまゝ、落葉の上に伏し臥しぬ。時しも兩人の聲を聞きつけて、
 一散に駆け来りしは、妙子が居間に居たる義通で、二階の書齋に籠りし梅澤深と成り、
 二人は先狭山と妙子を眺めて、愕然として驚きながら、互に顔を見合はして詞だもなかり
 き。狭山は何気なく潔に向ひ、

「梅澤さん、些と御注意を願ひたいです……、今妙子さんは、すんでの事に、この井戸へ

お陥りある處で……」

潔は愈々喫驚して、體を反らし、

「ア、爾でしたか……僕は一心に編纂に従事して居たので……何事も、少しも心づきませんでした……」

狭山は首肯づきながら、俄に義通の方に向き直り

「オ、貴方は大阪の櫻田さんで被在つしやいますナ……恰宜い處でお目に掛りました」

義通は小首を傾けて、
「ハイ、私は如何にも櫻田義通ですが……貴方は是まで更にお見受け申さんやうで……失禮ですが能方で被在つしやいましたかナ」

狭山は軽く打笑ひて

「ハ、ハ、ハ、僕は確にお目に掛つた事がありますよ……狭山鑿三と申す者で……」

義通は如何にしたるか、エツと身を退りて、熱狭山の顔を見詰めたりの狭山は平氣にて妙子の方に願り向き、

「オ、妙子さん、貴嬢爾して被在つしやつては御健康に障ります……アノ梅澤さん、直にお居間へお伴れ申して下さい、何か非常に精神を傷めて被在つしやる様子ですから……」
言ひ畢らぬ中、忽ち「バタ」と足音聞えて、表の方より驅け込みしは、夫三上探偵なり。狭山を見て詞を疾め、

「狭山刑事、今果して非常な事が出来しましたよ、當家の芳子さんが、敬造君と御一緒に裏口から逃亡せんとしたので……矢庭に遮つて引留めた處が敬造君は亂暴にも短刀を揮つて、抵抗した者ですから、巳びを得ず縛しました、芳子さんは花岡君に伴れられて、唯今此處へ歸つて見えますので……」

言ふ中義通は、エツと身を反らして、二歩三歩退りながらに、表を指して立ち去らんとしぬ、狭山は目敏く見遣りて、軽く袂を引留め、

「櫻田さん、此處でお目に掛つたのは非常に幸ひでしたよ、唯今お開の始末ですから、直に當家で取調べに掛る積りです……貴方も是非お立會を願はねばなりません……」

言ひつゝ願り返りて、一聲鋭く呼子の笛を吹き鳴しぬ。

其六十五

今しも狭山が吹鳴らしたる、一聲の笛の音は、夜の寂寥を破つて、清く、鋭く、玉を振ふ如く牙を響かぬ。それと共に、大地に突伏したる妙子は崖破と跳ね起きて、思はず踏張と潔が腕に取絶れり。潔はハッと進み寄つて、妙子を扶け擁へしまゝ、うろくど眼を配れり。狭山に引き留められて躊躇せる義通は、忽ち電氣に觸れし如く、ビリリと體を顛はしたり。折から月は、徐ろに薄雲を排きて、凄く冷やかに四人が頭上に光るなりけり。しんくとして淋しかりし邸の周圍は、俄にガヤガヤ人聲起りて、靴音は八方に響き初りぬ。垣根越に透かし看れば、赤の線を表はしたる提灯の火影は、螢の飛び交ふ如く、ちらくど走せ途ひぬ。嗟、嗟、舞臺は今や一變したり、最後の幕は切つて落されんとす、若當の犯人が邸内に潜めりとすれば、あはれ全く袋の鼠ではあり了りしなりき。狭山は身動さもせず衝立ちたるまゝ、驚き憫れたる三人を見廻はして、俄に空を仰ぎつゝ、

阿々と打ち笑へり、笑ひながらに軽く潔の方に顧り向きて、

「ハ、ハ、ハ、御尤です、定めて御意外でしたらう併し是も犯人捜査の爲ですから、已むを得ない者と思つて戴かねばありません……時に妙子さんは御病中でもあり、非常に御心痛の折柄ですから、爾して外氣にお觸れなすつては宜しくありません何か直にお居間へお伴をして、お氣をお静めなさるやうにさすつて下さい、訊ねたい事があれば、私がお居間へ参る事に致します……處で取調への第一着手に、先芳子さんに向ひて、逃亡の理由を聞き質さなければなりませんので、何か暫くの間、御邸内の應接室なりとも、拜借致したいです、チ妙子さん、この事は何か御承諾を願ひたいんで……爾して櫻田さん、貴方も大變御迷惑でせうが斯いふ形勢ですから、何もお掛り合せだと思つて臨時に水無瀬家の御親族を代表なすつて、尋問の席へお立會下さい、是は芳子さんなり妙子さんなりの御利益の爲に、特に一個人の狭山鑿三からお願ひ申すのです……無論御承諾下さるでせうナ」

言いつゝ、義通の顔を打ち守れり、義通は落附さ濟したる態度にて、

「ハイ、宜しいですとも、私からお願ひ申しても立會致したいと存じますので、何分妙子

は唯一人の姪の事ですから、随つて不便にも存じて、彼が利益は飽くまで保護して遣りた
 い存念です……では應接室へお通り下さい」
 言ふ中潔は、尙清々として精神を失へる妙子を引き連れ、紅石俵ひに其居間を指して赴け
 り。其と同時に、狹山は義通に導かれて、十二畳の應接室には上り進みぬ。
 此處には電燈の光り燦然として、羞明ゆきまでに眼を射たり。狹山は進み入りて、其とな
 く室の様子を見廻りし後、先義通に椅子を進めて、其身も片隅の椅子に腰を下せり。
 間もなく下男吉藏の案内にて、この室に入り来りしは、署長、警部、又は刑事巡查等なり、
 何れも狹山が紹介にて、慇懃に義通に挨拶し、思ひくりに椅子に掛けり。即ち狹山は三上
 を招き寄せて、何事か言ひ合めしに、三上は首肯づきて、直ちに室外に立ち出でたり。
 其より五分間許り過ぎて、室外の廊下に三四人の足音響さぬ。何れも眸子を集めて、室の
 入口を見詰めしとき、面を掩うて悄々と入り来りしは、夫芳子ありき。看れば咲き散れる
 花の雨に傷めるやう、足許塵束おげに、なよくと進み来て、幾んど倒るゝ如く、狹山が
 前の椅子に凭り掛りぬ。その後方には花岡薫が、氣遣はしげに眉を翳めつゝ、悄然として附

添ひ居たるなり。
 狹山は沈と芳子の姿を打ち守り居たり、人々は片唾を呑んで静まり返りぬ、芳子は最悲しげに
 涙包みつゝ、涙れ返りて項垂れ居たり。

其六十六

狹山は徐に芳子が姿を打ち守り居たるが、即ち起ち上りて、慇懃に會釋を施し、

「芳子さん、お呼つけ申して甚だ失禮でした、別にお調へを致すといふ譯ではありません
 が、参考のため貴嬢へお聞き申したい事がありますので……何事も押し包まずに、明瞭に
 お話しを願ひたいです、でなければ、貴嬢の御身上に取つて、非常に御不利益でございま
 すから……」

言ひつゝ、芳子に椅子を進めて、其身も故の椅子に凭り掛りしが、更に重々しき口調にて、
 「唯今承はりますと、貴嬢は敬造君と御一緒に無断で邸内を立ち去らうとすすつたやう

ですナ……其は何いふお考でした、何故爾な御決心をなすつたんです……」
芳子は、犠牲に上りし哀れなる小羊の如く、沈み顔を閉ぢて、身動きもせず黙し居たるが、少時して、漸う顔を擡げて、

「ハイ……阿母さんに……お目に掛らうと存じまして……ひ、人命犯の嫌疑で、何時警察へ引かれるかも知れぬと、敬造さんから承はりましたので……そ、其で急に阿母さんが懐かしうなりまして……」

狭山は幾度か首肯づきながら、

「なるほど、御道理でございます……では貴嬢の發意ではなく、敬造君から勧められて、俄に其お心にお爲んなすつたんですナ……ア、宜しい、解りました……、乃で貴嬢は、何でせうナ、その人命犯の嫌疑を受けるといふ話に就いて、何かお心當りはあつたのでせうナ、若無ければ、幾ら敬造君から勧められても、俄に國許へお出發になる譯はない様に心得ますが……」

芳子は再び眼を閉ぢて、何事をも答へざりきの狭山は較詞を疾めて、

「ナ芳子さん、此處には署長を始め、他の警官方も被在つしやるから、克く氣を静めてお話しなさいよ、私は何處までも筋道の立つた御返事を聞かなければなりません……で、今言つたお心當りといふのは、決して無いとは言はれませんナ、イヤ其では事實が許さないんです、現に男爵がお果てをすつた現場には、貴嬢の頭字の遺入つた手巾が落ちておりました、爾して判検査が出張して取調べを致す際、貴嬢は背齋の暖室爐の前に被在つしやいました、其迹には血塗れの書附が落ちて居りました、この二點の證據物は、極めて有力な嫌疑の材料となつて居ますから、貴嬢は是に就いて明瞭に辯明しなければなりません……總て一切の秘密は、打ち割つてお話を願ひたいのです……」

芳子は伏さて、ふるくと緑の髪を顔はしぬ、人々の視線は、一齊にその頭に注がれたり、花岡薫は堪へ兼ねて立ち上り、何事か言はんとしたるを、狭山は早くも目配もて制止したり、即ち芳子は微かなる顔ひ聲にて、

「ハイ……その手巾は、何して現場に落ちて居ましたか妾は少しも存じません……」

「爾して、書附は」

「そ、其も……妾は更に見受けませんので……」

狭山は俄に姿勢を正して、屹度芳子を見詰り、

「では、二點の證據物件とも、貴嬢は更に御存じまいのですナ、確にお心當りはありませんですナ……宜しい、この事は追つてお尋ね申す事に致しませう……處で今一ッお聞き申したいのは、客年十二月の下旬、貴嬢は柏木春雄といふお方と伴れ立つて、舊二條新地の旅宿へお越しなすつた事がありませんか、イヤその柏木君と御一緒に、旅宿へ御一泊なすつた事はありませんでしたかへ……」

言ひ畢らぬ中、芳子はヒクリと體を顛はして、殆んど椅子より倒れ落ちんとしぬ。狭山は際々鋭き口調にて、

「是は定めて御存じないとは申されますまいナ、現に旅宿の主婦といふ活きた証人が居て、竟つく貴嬢のお姿を記憶して居ますから……若御知承ないと仰しやれば、唯今直にその主婦を呼んで、貴嬢に御紹介申すまでの事……エ芳子さん、奈何でござりますか……」

言ふ中芳子が顔は、死したる如く蒼白になりて、靨紫色となりし唇を顛はし、

「ハ、ハイ……そ、その柏木さんと……旅宿に参つたのは……妾に、妾に相違ござりません……」

言ひつゝ顔を掩ひて、倒るゝやうに伏けり。人々はアツと叫びて身を反らし、蒸は憎として、夢に夢見る如く、瞬もせず芳子を見下したり。

其六十七

狭山は、宛かも敏捷ある獵犬の、小鬼を追ひ詰める如く、一際急調に聲を厲まして、

「芳子さん、貴嬢は愈柏木春雄さんと共に、舊二條新地の旅宿へ御投宿なすつたに相違ありませんナ、其春雄といふのは、恰も當時毒殺された本人です、御同行の貴嬢が、其毒殺の事情を御存じまい等はありません、サ早く、真直に其事情をお述べ下さい……」

哀れ芳子は、鋭き詞に問ひ詰められて、今や全く秘密を打ち明けねばならぬ始末ではあれ

「そ、其も……妾は更に見受けませんので……」
狭山は俄に姿勢を正して、屹度芳子を見詰め、

「では、二點の證據物件ども、貴嬢は更に御存じかいのですか、確にお心當りはありませ
んですか……宜しい、この事は追つてお尋ね申す事に致しませう……處で今一ツお聞き申
したいのは、客年十二月の下旬、貴嬢は柏木春雄といふお方と伴れ立つて、舊二條新地の
旅宿へお越しなすつた事がありませうか、イヤその柏木君と御一緒に、旅宿へ御一泊なす
つた事はありませんでしたかへ……」

言ひ畢らぬ中、芳子はビクリと體を顫はして、殆んど椅子より倒れ落ちんとしぬ。狭山は
隙さず鋭き口調にて、

「是は定めて御存じないとは申されますまいが、現に旅宿の主婦といふ落きた証人が居て、
免つく貴嬢のお姿を記憶して居ますから……若御知承ないと仰しやれば、唯今直にその主
婦を呼んで、貴嬢に御紹介申すまでの事です……、エ芳子さん、奈何でござりまするか……」

言ふ中芳子が顔は、死したる如く蒼白になりて、較紫色となりし唇を顫はし、

「ハ、ハイ……そ、その柏木さんと……旅宿に參つたのは……妾に、妾に相違ございませ
ん……」

言ひつゝ面を掩ひて、倒るゝやうに伏けり。人々はアツと叫びて身を反らし、驚は憎とし
て、夢に夢見る如く、瞬もせず芳子を見下したり。

其六十七

狭山は、宛かも敏捷なる獵犬の、小鬼を追ひ詰める如く、一際急調に聲を厲まして、

「芳子さん、貴嬢は愈柏木春雄さんと共に、舊二條新地の旅宿へ御投宿あすつたに相違
ありませんか、其春雄といふのは、恰も當時毒殺された本人です、御同行の貴嬢が、其毒
殺の事情を御存じかい筈はありません、サ早く、真直に其事情をお述べ下さい……」

哀れ芳子は、鋭き詞に問ひ詰められて、今や全く秘密を打ち明けねばならぬ始末ではあれ

りのハラ／＼と溢る、涙を、辛くも拂うて面を上げしとき俄に入口に足音響きて、ハタ／＼と此室に駆け込みしは妙子あり。其ま、芳子が膝に取つきて、身を懐わつ、泣き沈み、

「そ、そ、其事情は……妻から申します……」

言ひ掛けて、後もや紅涙に咽び入るなり。人々は再び喫驚して、妙子の姿を見詰りし時、妙子は漸う涙を留めて、狭山の面を打ち仰ぎ、

「その事情に就きましては、大變長いお話がございますので……た、唯今は、概略だけ申して置きます……妾は幼少の時、東京で孤兒になりました半年は義理の叔母の厄介になつて居りました、唯今お話の柏木春雄と申すのは、其叔母の一人子で、妾の爲には義理の従兄弟なるのですが、恰も厄介になつて居ました時、叔母の考で、將來は妾と春雄さんと夫婦にする事にあつて居りました……其後妾は、亡くなつた叔父の情で、當家へ引取られまして、斯して暮して居ります中、昨年の秋でした、久し振に東京へ參つて、叔母にも春雄さんにも會ひましたが、其時は春雄さんの舉動が大變更つて居て、聞けば不品行の有丈を盡して、後には詐欺取財とかで、二三次も監獄へ這入つたとの事でしたから、妾は與

驚して、俄に怪くなりましたので、成るべく春雄さんに遣はさしやうにして居ますと、春雄さんは意地悪く妾に附き纏うて、以前の話を口實に、是非とも夫婦になれ、其が嫌なら一思ひに殺して遣ると、最、最身の毛も凍立つやうに、妾を責め立てるのでございます、或日叔母の名前で、妾を上野の料理屋に連れ出して、薄暗い一室に閉ぢ籠めまして、急夫婦にならねば、自分が持つて来た毒藥を飲ませる、其れが嫌なら今日から私の妻になるのだと、退引ならん難題を言ひ掛けましたので、妾は怪いながらも思案して、其れでは屹度夫婦になりませう、ですが、唯今直にといふ譯には參りませんから、約束だけ致して置ませうと申しましたら、屹度其に相違ないナ、では其約束の證據に、一生取るに取られない印を留めて置くと申しまして……妾と、爾して自分の腕に……」

言ひ掛けて忽ち面を伏けながら、聲は涙に堰き留められぬ。狭山は驚立ちて椅子を引き寄せ、

「あるは、では貴嬢の左の腕に在る、黒蛇の刺青といふのは、全く春雄さんの無理絡めから生じたんですナ、宜しい、解りました……で早く其先をお話しなすつて……」

妙子は堰さ上ぐる涙を辛くも抑へて、

「ハ、ハイ、その御青で、辛と其處を逃げ出して其日の夜汽車で、俄に京都へ歸つて参りました……ですが其後御青の事が氣になつて、若人に見られたら如何しやう、この事が世間へ漏れたら、何ぞ噂が立つであらうと存じますして、種々と心配した揚句に、辛と腕環を求めて、御青を隠して居ましたのが、何時の間にか、芳子さんに見つけられて其仔細を問ひ詰められたもんですから、決して御他言なさらないやうにと約束して、悉皆事情を打明けました、すると芳子さんは非常に妾を不便に思召して、其後は陰にあり日向になり、共々に妾の秘密を守つて下さいましたので、……」

首ひつ、芳子を見上げて、ホロリと感謝の涙を流しつ、

「其から一月程も経ちまして、或夜芳子さんと御一緒に、新京極の演劇へ参りまして、其歸途に、餘り月影が美事なので、十二時過大和路を歩んで居ますと、不意にバツリ出會つたのは、今申した春雄さんでした、妾は餘り意外でしたから、喫驚りして立ち留つて居ますと、春雄さんは何を間違へてか、ア、妙子さんと尋つて、突然芳子さんを引留めまし

た、尤其時は、出入の髪結が間に合はないで、芳子さんも妾と一緒に、夜會結びになすつて被在つしやいましたので、其に街燈が大變薄暗うございましたから、何かした途端に、間違つたのであらうと存じます……妾は春雄さんを見て、何だか怪い敵に會つたやうに、慄と恐ろしくなつた者でございますから、ツイと横手の小路に駆け込みまして、何も角も忘れて了つて、邸へ逃げて歸りましたが、後から芳子さんの事を思ひ出して、ア、お悪い事をした、全く妾のためには、芳子さんを災難に陥れたのだと思つて、胸を苦しめて心配して居ますと、芳子さんは其夜の二時過に、密と裏門から、お濱の手引でお歸りなすつて爾して妾の居間へお越しなすつて、恰と幸ひでした、妾は彼の方が春雄さんだと存じたから、貴嬢をお逃し申さうと思つて、故と手を引かれて、北の方へ往つてる中に、春雄さんも辛と氣がついた様子でしたが、最貴嬢が舊の所にお在なさう筈はないので、宛で人質のやうに、妾を二條新地の旅宿へお連れなすつたのです、妾も荒立ては、貴嬢のお身の上に関りはしないかと思つて、柔順に宿屋へ参つた上で、辛と唯今逃げ歸りましたとのお詞でございしました、ですから、芳子さんが春雄さんと御一緒に、其旅宿へお越しなすつたのは

全く妻の爲でして、其時毒薬をんか、持つて被在つしやる善がございませぬ……其に芳子さんは大變御親切な情深いお方で、人を毒殺するなんて、爾な悖りしい事は、何したつて爲さらう譯がありません、その事は妻が屹度お請合ひ申します……」

涙に咽びながら、辛くも述べ了りぬ、狭山は沈と妙子を見詰めて、
 「では、舊二條新地の人命犯は、貴嬢も芳子さんも、更に存じないのでございます……其で大分事件の真相が分つて來ました……併し第二の男爵を狙撃したのは……」
 妙子は極めて落つきたる體にて、神々しき氣高き面を振り上げつゝ、今は清しき眼元に、一點の涙をも留めずして、

「ハイ、叔父を幽銃で撃ちましたのは……、全く、全く妻に相違ございませぬ……」

其六十八

わはれ妙子は、大理石の肖像の如く、端然として容を正しつ、叔父の男爵を殺し、は、全

く其身に紛れなき由を自白しぬ。並み居る人々は、驚愕の餘り身を反らして絶叫し、刑事巡査は破羅々々と駆け寄りて、左右より妙子を取圍めるあり。

狭山は落つきたる態度にて、徐に刑事を押し鎮め、即て莞爾と笑ひを含んで、妙子を見下しつゝ、

「ハ、ハ、爾でしたか……貴嬢は男爵から、非常な御恩義を荷つて被在つしやるやうに聞き及びましたが、其大恩ある叔父さんを殺害せざるに就いては、克くくの御事情がお在んおすつたのでせうな……其を承はりたいと存じますか子」

妙子は無限の悲哀に打たれて、覺ゆるず雙の眼に一杯の涙を溢へしが、忽ち雄々しく押し拭ひて、

「ハイ、亡くなつた叔父は、妻に取つては第二の親……イ、エ産の親よりも、尙篤い恩義を受けて居りますので……何して妻の身で……この妻の手で……そ、そ、其大恩ある叔父を殺されませうか……是にはお察しの通り、深い事情もございますので……」

言ひ掛けて、今は堪らずハラ〜と涙を流し、が、忽ち進み寄りて、芳子が手を併と握り、

「芳子さん……この事情を話すに就いては、自然貴嬢の御身上にも立ち入らねばなりません……そ其代り、妾の罪は残らず懺悔致しますから……と、情願、御堪忍遊ばして下さい……」

手を探りて揺り動かして、暫く熱涙に咽びたるが、即ち狭山の方に向き直りて、再び涙を拭ひ、

「その事情と申しますのは、叔父が亡くなります十日程以前の事でした、芳子さんはお可憐さうに、叔母さんから無理に勧められて、敬造さんと約婚のお約束を爲すつたのです……叔父さんは大變芳子さんをお可愛がりなすつて、妾と一緒に養女にさる積りでしたから、後に櫻田さんから、その事に就いてお掛合のあつた節、初めて約婚の始末をお聞きなすつて、其は……非常を御立腹でございまして……ですから芳子さんは、叔父と櫻田さんとの間に立つて、元來順柔しいお性質ですから、非常に御心配なすつて、泣の涙で被在つしやいましたが、恰も叔父が歿された其晩の事でした、敬造さんが竊と芳子さんをお訪ねなすつて、妾が春雄さんに苛められたやうに、是非約束通りに大阪までお在で、其が嫌な

ら阿母さんと叔母さんと芳子さんを相手取つて、欺詐の訴を起すなんて、最最近で聞いてさへ胸が沸き立つやうに、散々お苛めなすつたのださうでございまして……芳子さんは其のまゝ居間へ引取つて、泣いて泣き倒れて被在つしやいましたから、妾もお涙も、萬一もの事があつてはあらぬと、氣を注いで居ますと、其夜の十一時頃でした、お濱が齒痛で寝られないで申して、藥を取に妾の居間へ参つた者ですから、早速芳子さんの事を尋ねますと、お一人で夜着を被つて泣き入つて被在つしやるとの事でございまして、妾は大變お可憐さうに思つて、何とかお慰め申さうと存じて、他のお方へは成るべく知れぬやうに、お濱と一緒に忍び足で廊下へ出ましたが、其から叔父の居間の前まで参りまして、ヒタリと出會つたのは芳子さんでございまして、妾はアレと言つて見廻はしますと、芳子さんは泣く泣く伏いて、片手に短銃を持つて被在つしやいましたから、妾は最喫驚りして、自殺を爲さるに相違ないと思つて、直其短銃を引取らうと兩手を掛けました、芳子さんも喫驚なすつて、其を取られまいと互に争つてる間に、何した途端か、妾の手が弾機に觸れて、不意に耳も潰れるほど、鳴り響きましたので、妾もお濱も芳子さんも、ばたりと廊下に倒

れて了つて、宛で氣絶して居たのでござります、すると呼び起されて、辛と眼を覺まして見ますと、何時の間にか其處には梅澤さんが立つて居て、「貴嬢方は……まの大變なことをおすつた……男爵のお姿を御覽なさい」と言はれましたので妾も芳子さんも夢が覺めたやうに、平氣で叔父の居間へ這入つて見ますと、妾が誤つて放した短銃の彈丸が、因果と叔父の首筋に命中つた、果敢なく絶命して居ましたので、兩人とも、仰反つて倒れたまゝで、其後の事は……少しも、少しも存じませんでした……」

言ひつゝ、伏さながらに、聲を忍びて泣き入れれば、芳子も共音に咽び入り、妙子は急に面を上げて

「妾は……妾は是から懺悔せねばなりません……その翌朝、芳子さんは直に自首せうと仰しやつたのを、妾は強つて引留めました……其と申すのも妾の身に淺狭しい怨が纏はつて居ましたので……妾の積りでは、十三の時から當家で育てられて、養女にまでして戴いたのだから、屹度此家の相續人にある者と存じて居りました、スルと叔父が亡くなる前に、何か妾の身上か、又は親戚の事に就いて、不安に思つた點がありましたと見えて、急に芳

子さんを相續人に定めて、妾を他へ縁づける事にお決めなすつたさうで、其事は當時梅澤さんから承はりました……妾は芳子さんとは違つて、勝氣な行過ぎた性分でござりますから、若し芳子さんと定つたら、親族の方へも、召使の者にも面目ないと存じまして、其相談の爲に、此處に居られます義通といふ叔父を、態々東京から電報で呼び迎へた程でした、其電報を打ちますのも、芳子さんへは、全く春雄さんの事を相談するのだと偽はりしましたので、其では召使なんか遣つて、後に他へ漏れてはならんから、妾が一人で電報を打つて来て遣らうと、御親切にも、夜分竊と三條の電信局までお越しなすつたのでござります……ですから妾は、縦令一日でも當家の跡目を継ぎたいといふ淺狭しい心から、現在妾の手で大恩のある叔父を撃つて置きながら、今日まで知らぬ風で、自首も致しませんで過しました、今夜或事情から、熱く、自分の罪を悟りまして、亡くなつた叔父と、芳子さんとへ申譯のため、庭の井戸へ身を投げて死ぬる積りでござりましたので……妾の懺悔は、芳子さんの居間に殘してある遺書の中に詳しく認めて置きました……」

言ひつゝ、帳び伏して、人目も恥ぢず、涙の限り泣き沈めるなり。狭山は眼を屢睜きて眺め

遣り、

「なるほど、一應は解りました……ですが、男爵をお撃ちますつた事で、種々の證據物件を押し隠したのは、全く貴嬢の御所為でしたかナ……」

言ふ詞も畢らぬ中、傍なる梅澤潔は衝と進み出て

「イヤ、其は妙子さんも芳子さんも、更に御存じない事です、残らす私の考で取計つた譯ですから……」

其六十九

狭山は徐に梅澤潔を見下して、

「なるほど、證據を晦さんため銃殺後の、始末をお着けなすつたのは貴君ですナ……宜し
S、其時の模様をお話し下さS」

潔は幾度か太息を吐き、

「ハイ、私の所為に相違ありません……恰ど其際は、二階の私の居間で、既に睡つて居たですが、不意に短銃の響に驚かされて、夢心地で段梯子を駆け降りて見ると、妙子さんと芳子さんは、廊下に倒れたまゝで氣絶して被在つしやる、爾して妙子さんの右の手に、短銃を持つて被在つしやいました……私は非常に驚いて、全く誤つてこの短銃をお放しなすつたに相違ないと思つて、その邊を見廻しますと、如何にもその彈丸は、男爵のお居間の障子を突き破つて居る、サア大變だと思つて、直にお居間に駆け込みますと、御承知の通り、男爵は血塗れになつて、お果てなすつて被在つしやいましたのです……私は憤として了つて宛で夢のやうでしたが、辛ど氣がついて、偕腕を組んで思案致しました、ア、お怪我とは言ひながら、大變な事になつて来た、此まゝ、警察へ届けたら、忽ちバツと世間へ知れるに相違ない、素より過失とは分り切つて居るが、肉身の叔父御あり、義理の御養父ありを銃殺したとあつては、妙子さんが世間へ合すお顔があるまい、第一水無瀬家の非常な瑕瑾にある譯だから、亡くなられた男爵、存へて被在つしやる妙子さん芳子さんのお爲に、隠されるだけは證據を隠して、世間の悪評を打消さねばあるまいと決心しました

……乃で先妙子さんのお手から、短銃を探り上げて、其處に落ちてあつた手巾……爾です、其には芳子さんの頭字が這入つて居たんですが、當時は少しも心附きませんでした……その手巾で、綺麗に硝煙の痕を拭つて、奥の帳簾等の抽斗から、一筒の弾丸を捜し出して、今放した痕へ装めて置いて、舊の通りに整然と抽斗に藏つたのです、其からお爾嬢が氣絶あすつた時、何した途端か、兩戸が一枚脱れて居ましたので、其も舊の通り閉め切つて置きました……次に男爵のお側に往つて、注意して見ると、認め掛けてある背附の上に、バタリと伏いて斃れて被在つしやいましたから、竊とその血塗れの書附を引取つて見ますと、御當家の相續人は、愈芳子さんに定めるとの趣を認めてありました……私は元來妙子さんのお爲に、何處までも御利益を謀る決心でしたから、斯き書附が残つて居ては宜しくないと、其まゝ引破つて袂に入れましたが、遂に翌日にあつて、二階の書齋の暖室爐に投げ込んで了ひました、爾して又男爵のお側には、太切を鍵がございましたから、是も他の人に取られてはあらぬと、直に妙子さんの手文庫の中に入れて置きました、最後に弾丸の痕を留めた、男爵のお居間の障子を繕つて、是で最大丈夫だと、初めて氣絶して被在つしや

るお爾嬢を介抱致した始末です……併し、今に不思議でならんのはお濱の事です私が二階から降りた時には、最早何方へか參つて居たので、屹度お爾嬢が氣絶して被在つしやる際、慌て、逃亡した者だらうとは察しるですが、今に消息も致しませんので、非常に心配して居る譯なんです……」

狭山は切に首肯づいて、

「ハ、ハ、爾ですか……すると唯今お三人のお話を引纏めて言へば、第一芳子さんは柏木春雄君と旅宿に同行し、又微行の姿で夜中電信局へお越しなすつたには相違ないが、其は妙子さんに對する友誼上から成立つたので、毒殺事件には更に關係のないこと、第二妙子さんは、春雄君の爲に割青を餘儀なくされたが、其後一回も會はないので、是又毒殺事件には關係ないこと、尤芳子さんの自殺を止めるために、誤つて男爵を銃殺し、且相續人となる希望で、今日まで其事實を陰蔽したが、遂に懺悔して非戸に身を投げんとしたこと、第三梅澤澤君は、水無瀬家と妙子さんのお爲を思ひ、出来るだけ證據を掩ひ隠さんとしたこと、唯お濱の踪跡のみは今に不分明なること……といふ様な譯なんですナ、なるほど、

宜しい、解りました……是れで自然と犯罪の真相も解めて参りました……」
 言ひつゝ、小首を傾けて思案に沈みしが、俄に椅子を離れて、眞直と起ち上り、
 「併し、妙子さん……、貴嬢は思召違ひを爲すつて被在つしやいますナ、イヤ芳子さんも
 梅澤君も悉皆お勘違ひを爲すつて被在つしやる……即ち男爵を銃殺したのは、妙子さん、
 決して貴嬢ではありませぬよ……他に歴然とした犯人が居ますので……」
 妙子と芳子は、エツと叫びて身を反らしぬ、潔は呆氣に取られて愕然たり、花岡薫は覺悟
 ず雀躍して飛び出し、

「さ、狹山君……そ、其は事實か……ソ一ヲ見給へ、芳子嬢妙子嬢に限つて……て、
 て、天地は覆つても……」
 言ふ中署長も起ち上りて、

「狹山探偵……他に犯人があるとするれば……、は、早く手配をせんければ……」

狹山は急に両手を掉つて押し留め、
 「イ、エ、手配りは要らないです……其犯人は現に此席に居りますよ」

一同は、思はずエツと聲を擧げて、室内を見廻はしたり。其間に狹山は、街々と櫻田義通
 が傍に寄りて、其肩先を掴み、

「奈何です、櫻田さん、最宜い加減に假面を脱がうぢやありませんか……イ、エさ早く
 自白なすつては奈何ですナ……」

義通は眞直と起ち上りさま、狹山が手を攘ひ退けて、眼光鋭く睨み詰め、

「ナニツ、怪しからん……犯人を……そ、其證據が……ありますか」

狹山は一聲高く聲を厲して、

「お黙止んなさい……證據が……出て、犯人呼ばりが出来ませぬか……議論は無用だ、今
 君に紹介せる人があるんだ……」

言ひつゝ、顧り返りて、三上を目配じたり。三上は慌て、室外に走せ出でしが、即て足音高
 く伴ひ來りしは、大阪曾根崎の光枝、東京なる柏木春雄が母、及び小間使のお濱なり、
 義通は一目見るより、呻るが如き顔ひ聲にて、

「ば、馬鹿者奴ツ……克くも揃つて來せたナ……」

言ひつゝ、蹴り飛び退くよと見る間に、懐中より短銃を採り出して、狹山が咽喉を狙ひ定めぬ、あはれ狹山は、今一刹那にして、果敢なき硝煙とは化し去らんとす。

其七十

義通は短銃を採り出すやいな、狹山が咽喉の真中央を狙うて、今や火蓋を切らんとしぬ。人々は咄嗟と叫んで總立となれり。刑事巡査は「己れッ」と言ひさま、左右より義通に銃り蒐らんとす。

狹山は両手を差し上げて、銃ぞく絶叫したり、

「皆さんの静まり下さい、決して御心配には及ばない……サ義通君、撃てッ、十分灸所を狙つて撃つて見給へ……」

「し、し、知れた事だ……」

猛り狂うて、サツと身を進め、あはやと見る間に弾機を引けり。俄然として一聲銃ぞく耳

を劈き、硝煙は濺々として室内を罩むるかと思ひの外、微に弾機の音のみして、何の響すら聞けざりき、人々は我と我耳を疑ひて、瞬もせず眼を見張れり、義通は熱りに熱り、猛りに猛りて二たび三たび四たびまでも弾機を引きしが、尙何の手應だもなく、今は身を退つて堅然として憫るゝのみなり、狹山は俄に肩を揺つて、阿々と笑ひ初めぬ、

「ハッハ、ハ、ハ、ハ、奈何だ、義通君、彈丸装置のない短銃は、妙に音のしない者だナ……君は京都ホテルで會つた給仕の面を覚えてお在かへ、彼時君が爲に給仕の勢を取つたのは、全くこの狹山鏗三なんだよ……既に其以前からサ、君の大阪の宅へは、部下の探偵を車夫にして入り込ませて置いたから、君なり敬造君なりが、日々遣つてる所爲は、蟻の這ふ事まで解つて居たのだ、乃で其探偵から、君が急に京都へ出掛けて、晩の何時にはホテルへ到着するといふ電報があつたから、直にホテルへ駆け込んで、主人に依頼した上で、俄に僞給仕にあつて、君のお着を埃ら受け始めたサ……其から其夜の十一時頃だつたかサ、君が便所へ出て往つた迹で、竊と室内に這入つて、失禮ながら艶を調べたのだ、その中には、今其處に持つて居られる、彈丸装置した短銃があつたから、是は危険だ、この次には

僕が狙はれる運になつてゐるから、先に弾丸だけ預つて置かう、雙方手数を省く譯だと、其弾丸を抜き取つた際といふ處へ、君がお歸りだつたから、ヒタリ壁の下に隠れて、徹夜までんちりともせず、冷汗を掻かされたが、翌朝君が食堂へ往つた途で、幸と逃げ出して宅へ歸つた次第なんだ……」

言ふ中義通は、ハタリと短銃を投げ捨て、倒るゝ如く伏ひながら、床の上に胡坐を組むぬ。狭山は徐に見下して、

「處で、今言つたやうに、君の所爲は、残らず探り知つて居るよ、又此處には、君が引出した小間使のお濱さん、そのお濱さんを預かつた大阪の光枝さん、殊に散々酷い目に遇はされた春雄君の母御まで、残らず揃つて目の前にお仲れ申したんだから、最仕方があつたいややないか、淡泊と自白しては奈何だ……エ義通君、尙自白は出来ぬのか、出来なければ宜しいよ、僕が代つて白狀して見やう、若間違つたら、遠慮なしに言つて呉れ給へよ……」

言ひつゝ、優々と舊の椅子に坐を占めて

「先身元から申し立てる、君は妙子さんの母御の弟であつて、若い時から随分放蕩を仕盡した男だ、その結果、二十四五の時から、博徒仲間に入つて、尊迫喧嘩その他際どい處を打つて居たが三十七八の頃、此處に被在つしやる春雄君の母御……その際は無論寡婦であつたのだ……このお方と私通して、後には宅に乗り込んで、夫婦の如くあつてゐる中、弗々財産を持ち出して、二年の後には、全く柏木家の資産、爾さ大凡そ一萬圓程の者は、君が悉く無くして了つたのだ、乃で春雄君親子は忽ち路頭に迷はねばならん始末となつたのを君は無情にも慘酷にも振捨て、一時踪跡を晦ましたといふ譯だつた……その後、矢張東京の櫻川義通君……是は君ではないよ、眞實の義通君の事だ……そのお方が不意に亡くあつて、妻君が一人で暮して居たを、君は例の手段を取り入つて、遂に其寡婦さんと夫婦になつたのだが、この眞實の義通君は至つて偏屈人で、知己朋友もなく、親族へも數十年消息をしないといふ人物であつたから其を幸ひ、何して戸籍を護衛化した者か、死者の名を奪つて、君が其まゝ櫻川義通とあり済したのは、確か一昨年の事だつたよ、ヌルと昨年の冬、大阪に居られた、義通君の實兄義文君が、俄に病死されて、後見の事を頼んで来た

者だから、元來冒險家の君は、時機至れり、この際偽叔父の後見人となつて、櫻田が財産を一掴みにしやうといふ謀叛を起した譯だ……處が茲に一ツ困つたのは、柏木春雄君の事……母御の前で言ふのは心苦しいが……實はその春雄君もサ、君の所業を見習つたのか、随分酷い惡黨の方で、或場合には、君よりも立勝つた伎倆を持つて居たから、何時の間にか、君が櫻田義通と名乗つてゐるのを嗅ぎつけて、大手を振つて談判に出掛けた事がある、その際君は確に千圓許強説られたチ、イヤ一回二回には止らぬ、其後は度々押し掛けて、君が弱點に附け込んで、悉く無心を吹き掛ける、君に取つては、實に獅子身中の蟲で、言はゞ君が折角他の生血を吸つてると、その又生血を春雄君に吸ひ取られる始末になつたから、彼奴を生かして置いては、所詮仕事は出来ないと言ふんで、君が忽ち殺意を起したのは昨年秋頃であつたらう、其から機會を見済しては、屢々東京で手を下さんとしたが流石に露頭を恐れて躊躇してると、其春雄君は妙子さんの迹を追つて、この京都へ出掛けたのだ、君はこの場合を失つてはならぬと、直に又春雄君を追驅けて、竊と京都へ出掛け、姿を扮して附狙つてる中、十二月の末の或夜であつた、春雄君は妙子さんと間違つて、

芳子さんを二條新地の旅館に連れ込んだ事があるチ、君は遠方から其を見届けて、竊に兩人の跡を跟けて往つたが、巧に罪跡を隠す爲に、人々の寢静つた頃を計つて、旅館の裏手の畑地から、離座敷の屋根に攀ち登つて、其から前栽に降り立つて、何喰はぬ顔で離座敷に入り込んだのだ、無論芳子さんも春雄君も喫驚したに相違ないが、君は得意の辯舌で、詞巧みに、乃公も偶然此旅館に泊り合はしたとか何とか言つてサ、芳子さんが居ては仕事に邪魔になるから、早く歸るが宜いと言ふので、態々下駄まで取て来て潜り戸の錠を脱して逃した迹で、竊に煎茶の中に所持の毒薬を入れて、春雄君に飲ましたのだ、春雄君は中途で毒を知つて叫ばうとしたのを、君は毛布を被せて、力任せに捻ぢ伏せたので、死體の肩先にわつた紫色の撲傷は、全く其時の創なんだ……奈何だへ君、僕の話しに一點でも間違つた處があるかへ……ハッハハハハ、」

義通は眼を見張つて、磁乎と睨みぬ。狭山は急に容を正して、
「次には、君が男爵を銃殺した事を、明かに話して見やう……」

其七十一

義通は苦しき呼吸を肩に漏らして、眼を血走らせ齒を切り身體をびり、ど、顔はしつゝ、無念の拳を握り詰めぬ。人々は片唾を飲み眼を見張りて、義通と狭山が顔を、互るゝ見廻はしぬ、狭山は儼然と椅子に凭り掛りて、

「で、君は今言つた順序で、遂に柏木春雄君を毒殺して了つたのだ、併し是は君の側から論じると不正な欲望を充たす爲には、是非この非常手段を取らなければならぬので、言はゞ君は春雄君に取つて、終生の仇敵さんだ、即ち家名を傷けられ、財産を奪はれた、怨み骨髓に徹するといふ仇敵であるのだ、だから彼が活きてゐる間は、君は一瞬の間も枕を高くして眠る事は出来ぬ……のみならず、君が首尾よく偽叔父に成り済して、櫻山の資産を一掴みにした處で、其資産は又春雄君の爲に強請り取られる、強請り取つた揚句の果には、君を眞逆さまに突き落して、或は君の罪惡を警察に訴へるとか、又は慘酷な目に零落

させるとか、何れにしても怨恨を報ふには相違ない、君も流石の悪黨だよ、先の先までチンと見抜いて了つたもんだから、已むを得ず思ひ切つて、この邪魔者を遣つ附けたんだ……處で、今は既にその邪魔者を掃つた、まんまと偽叔父にあつて櫻山にも乗り込んだ、敬造君は案外愚物で、君に取つては、操人形も同じ事だから、願の揮り廻し様で何でも斯でも自由になる、世界は宛で君の物になつて了つた、サア爾なると、一層大きな謀叛を企てるのが悪黨の本領だ……乃で、君の姪に當る妙子さん、爾さ、このお方とは、確か君が柏木を立ち去つてから、更に消息をしなかつたやうであるが、大阪へ参つてから聞くと、今はこの水無瀬家にお在なすつて、加之その御養女にあつて被在つしやるとの事なんで、此奴面白、世の中が斯かにはトントン拍子に行く程なら、序に妙子さんを撮つて、あは克くば、水無瀬家二十萬圓の資産をペロリと一營に遣らうと思ひ立つたのは、爾さ、時日から推すと、確に一月上旬頃であつたらう、其から急に京都へ出掛けて、妙子さんを圓山の或旅宿に誘き出して、其時散々煽てやうと掛つたのだ、處か妙子さんから聞くと、實に意外千萬にも、自分が春雄君を毒殺する前二條漸地の、旅宿で落合つた芳子さんといふの

も、同じく水無瀬家に居て、當時は相續に關して、妙子さんの競争者となつて居るとの話なんだ……素より素早い鋭い君の事だから、其以前より芳子嬢を此まゝには捨て置かれぬ、若芳子嬢が春雄君と旅宿へ同道した事が、其筋の耳に這入つたら、必ず取調べを受けると相違ない、爾あると、其時には斯々の人物から助けられて、裏口から逃げ去つたと述べられた日には、忽ち索線が附く譯だと、非常に不安に思つて居た矢先に、今又妙子嬢の競争者と聞いた者だから、愈捨て置かれぬと決心したので、其から一旦妙子嬢に別れて大阪へ歸つた後に、種々工夫を凝らして居ると、幸ひにも運よくも、其芳子嬢は、以前から敬造君に娶はせる約束があると聞いたので此奴は愈面白くなつて來た、敬造君の妻として芳子嬢を迎へ取らば、前の毒殺事件も破れる氣遣ひがなく、又妙子嬢も、必ず水無瀬家の相續人に据る譯だから、一舉兩全の策だと思つたので、敬造君を操つて、芳子嬢との間に秘密の約束を結ばせ、借改めて男爵へ婚儀を申し込んだのだ、處が男爵は、其以前から、妙子嬢には斯な悪黨な叔父が附て居ると、竊にお聞きあすつた者を見て、妙子嬢の代りに芳子嬢を、相續人に定めやうといふお考から、斷然申込を謝絶なすつたので、折角

君の妙計もガッリ外れる譯になる、其では堪らぬと、一方は力を極めて敬造君を煽つて置いて、一方は自ら水無瀬家へ出掛けて、是非約束通りにと嚴談を試みたのだ、處が男爵は容易に承諾なさる御様子がない、殊に梅澤君の理窟を聞くと、如何にも理らしく取若く島もさい此まゝ、抛つて置けば、任組んだ大山が外れるのみでなく、毒殺といふ古疵まで露顯するかも知れない、實に拔差ならん始末にあつて來たのだ、その際君の胸中といふ者は、察するに無限の大苦痛を感じて、幾分か周章狼狽の氣味もあつたのだらうナ……」

言ひつゝ、詞を切つて太息を漏らし、更に義通を眺め下して、

「勿論、其に相違ない、犯人が罪惡の露顯を恐るゝのは、實に我々の想像外であつて、屹度その胸中には、善人が如何なる場合にも感じ得ない、極めて悲惨な痛苦な血汐を漂はすに相違ない、其證據には、罪の露顯を恐るゝ餘り、其罪よりも尙一層重い罪を犯す事が往々あるのだ、君も如何に膽力が据つて居ても、この定則を動かし得まい、定めて水無瀬家を辭して、旅宿へ引取つた後、心は無上に臆病になつて、見る者聞く者悉く慄ろしい、胸はワク／＼騒いで、幾んど沸騰するまでに熱した血汐が、一瀉に腦に注いで來る、其亂

れ狂つた心の中から、君が辛と割り出したのは、定めて斯であつたらう、既に一人殺したのだから、今一度遣つても罪は同じ事だ、前の犯罪を隠す爲に、二十萬圓の資産を奪ふ爲に、筆を手取早く男爵を殺害しやうといふ考案であつたらう、屹度其決心を附けたに相違ない手……乃で、其晩は恰も暴風雨が吹き荒んで居て、邸内へ忍ぶには屈竟だから、時間を計つて、旅宿を飛び出して、直にこの水無瀬家へ馳けつけたのだ、爾して高城を乗り越して、兩戸を閉めない先に廊下に忍び込んだが、生憎男爵の居間には、梅澤君が居たので、暫く呼吸を殺して埃つてる間に、梅澤君は二階へ登つて其代りに廊下に出て來られたのは芳子さんだ、すると男爵のお居間の前で、その芳子さんと妙子さんが出會つて、短銃を奪ひ合つてる中、不意に誤つて放されたのだ、總て物の機會を利用するには極めて素早い〇の事だから、其態につれて、電光の如く、男爵を狙ひ撃つたに違ひない、其際は、兩嬢とも氣絶して被在つしやるから、更に御存じの筈はないが、唯小間使のお澄だけが、君の姿を認めただので、手早く手拭で猿轡を欲めて、其まゝ引抱へて逃げ去つたが、其後誤つて男爵を殺したのはお前だ、暫く身を潜めるが宜い、お前の身上は引附けたと、首尾克く

欺して、光枝さんの宅へ預けたのだらう……奈何だ君、僕が調べた事は間違つてるか……
 ……若間違つて居なければ、速に伏罪し給へ……」
 尚に掛つて一喝したり、義通は覺ゆる身顛ひして、
 「アッ……君の眼力には驚き入る……如何にも、如何にも伏罪致した……」

其七十二

義通が伏罪すると共に、刑事調査は進み寄りて、舞々を綱を掛けぬ、義通は既抵抗すべき勇氣などもなく、儼然として眼を閉ぢたるまゝ、引き据ゑられたり。
 狄山は徐に手巾もて髭を拭ひつゝ、署長警部其他の人々を見廻して、
 「最後に、私は此事件に就いて、捜査の要點を申し置きたいです、唯今犯人に代つて述べ立てた事は、私自身に手を下して檢べた事、東京及び大阪へ部下の探偵を派して探り得た事、又此處に被在らしやる三人の證人から聞き取つた事、此三つを綴り合して、判断し推

突した事實なんで、素より一語一句、残らず確乎とした據所があるのです、併既に犯人が伏罪した上は、一々その事實と證據を説き明す必要はない唯此處まで探り究むるに就いては、實に非常な苦心を重ねました、その苦心を重ねた女に、又非常な利益も得ましたよ……私は職務上に就いて、常に完全な探偵を致したいと思つて居た、即ち或犯罪に關して、假に百の證據を認めたとして、其中九十九までは明瞭と解つたが、今一つ不分明であつた場合には、決して完全な探偵とは言はれない、で今回の事件に就いても、證據又は事實の上から見ると、嫌疑者は先芳子嬢の他にはない、併し彼微弱い芳子嬢の腕力で、何して爾な處が今言つた私の方針に照らすと、其處には了解し得ない或點があるのです……といふのは、先春雄君の肩先の撲傷である、この創を負はすに就いては、被害者と同等、若くは其以上の腕力がなくてはならん、何分敵手は毒殺と覺つて暴れるのだから、幾んど平常の二倍の力がある、其を無理縮めに捻ぢ伏せるのは、實に容易な仕事では無いのです……如何にも旅宿に同行したのは芳子嬢の他にはない、併し彼微弱い芳子嬢の腕力で、何して爾な事が實行されうか、縱し假に芳子嬢が毒殺したとしても、必ず腕力を貸した共謀者がある

に相違ないと思はねばならん、處で事實若くは證據から推しても、其共謀者は發見されなかつたのです……次に男爵銃殺の證據に就いても、矢張不分明の點は免がれない、即ち一度放つた短銃を、舊の通り彈丸装置して、硝煙を拭つて、抽斗に藏つて置くのは、極めて注意周到な遣方で、是が一人一人を殺した述の仕事かと思ふと、犯人は非常に度胸の据つた膽力のある沈着いた性質であければならん、斯な働は、所詮二十歳以下の令嬢の力で爲し得られる事ではありません、殊に現場にあつた證據品は、芳子嬢の手巾で加之頭字まで追入つて居る、枉げて芳子嬢の所爲と見做した處で、一方で爾な注意周到な働を爲して置さながら、一方で爾も不注意極つた事を爲さうと道理がない……、又妙子嬢だつて、短銃の始末を着ける程のお考があつたら、男爵秘藏の鍵を自分の手文庫の中に藏して置かれさうと等がない、詰りお兩嬢の證據品は、僕の意見に由ると、反對にお兩嬢の潔白を表はす反證となつて居るので、或は犯人が故意に仕組んだ事ではあるまいかと疑つた程でした……殊にサ、裁判醫が男爵の創口から探り出した彈丸は、當家にあるウニッソン會社小形の短銃の彈丸ではなくつて、今義通君が携へて居た、この中形短銃の彈丸に符合して居るです

……で私は最初から、お兩嬢は素より、梅澤君お濱へも嫌疑を掛けては居なかつたので、事實と證據の裏面を檢べて、種々と探偵を疑らした結果、遂に今回の犯人を突き留めたのです、尤是に就いては花岡薫君に謝さなければならん、君に向つては、常に嫌疑者はお兩嬢であるやうに言つて、殊の外お氣を揉ませたですが、是は親友を欺いた譯ではない、唯職務上の神聖を秘密を保つたので……一方は敵を油断させる策でもあつたのです、即ち實を避けて虚を構つたので、敵は東に在ると見せ掛けながら、其實西を狙つて居た譯なんです、又始終お兩嬢の跡を跟けたのは、犯人とお兩嬢の間には、必ず秘密があるに相違ないと思つて、其關係を取調べる爲でした……其さう何故、面と對つてお兩嬢を調べるかつかかどの疑問も湧くでせうが、若私が公然お兩嬢の取調べに掛つたら、逆も犯人は沈着いて居られない、或はお兩嬢に向つて非常な危害を加へるかも知れないと存じたので、是は單にお兩嬢を保護する厚意のみではなく、此上社會に對して、害毒を流させまいといふ微意に外ならんでした……私は是等の點を、諸君に了解して戴けば、非常に満足に感じますので……」

言ひつゝ、兩眼に熱涙を漂はして伏けり、彼は今や至難の大犯罪と説き明かして、不覺に堪し涙を淨べしなるべし。芳子も妙子も將花岡、梅澤等も、無限の情に打たれて、詞もあく感謝の意を表はしぬ。狭山は即ち椅子を引寄せ、

「妙子さん、貴嬢は非常に御心配なすつたでせうが、一旦懺悔した上は、潔白なお身體です、將來は芳子さんと共に、幸福にお暮しなさるのを希望致します、この柏木春雄君の母御は當時頼りのお方ですから、御親切に御保護を願ひたいです、又芳子さんは、男爵御死去の前に、相續人たる書附まで認めて被在つしやつたのですから、水無瀬家の御名跡をお継ぎなさるのには至當であらうと存じます、小間使のお濱は、至つて無邪氣な性質ですから、永くお目を掛けて遣つて戴きたいです、光枝さんは、決して罪はないですが、今少し怨氣を離れて優にお暮しなさるのを望みます、次に敬造〇は、自業自得とは言ひながら、全く義通君の爲に扱られたので、官吏に抵抗したのも、強ひて咎むる程でもないから、兎に角私から、今後の身上に就いて、少し説諭したいと存じます、三上君、此處へ同道して下さいませ……」

程なく三上に伴はれて、この室内に出で来りしは櫻田敬造なり、細目に掛りし義通を、驚りと眺め違りて、

「今次の間で開いたですが……偽叔父なんて、實に酷い奴ですナ……こん畜生……」

人々は思はず哄と失笑しぬ。狹山も變めたる眉を開きて、苦々しげに打ち笑へり。時しも曉鴉庭前に聲して、東山の空はのくと明け初む。

其より一月程経ちて、狹山が熱心ある幹旋に由り薫と芳子は芽出たく婚義を擧げて、水無瀬家の家名を継ぐ事となれり。妙子は特に五萬圓を分ち與へられて、梅澤潔と夫婦になり、是又楽しく暮らす事となりぬ。狹山は其後突然職を辭して、探偵界より其名を没したるが、次の帝國議會には、代議士狹山經三となつて、華々しく討つて出でぬ。

彼は探偵として實に非凡の技術を現はしたり。政治家としての技術は如何に、これ何人も目を刮つて眺むる處なり。

玉 葛 終

明治卅五年三月十一日印刷
 明治卅五年三月十五日發行

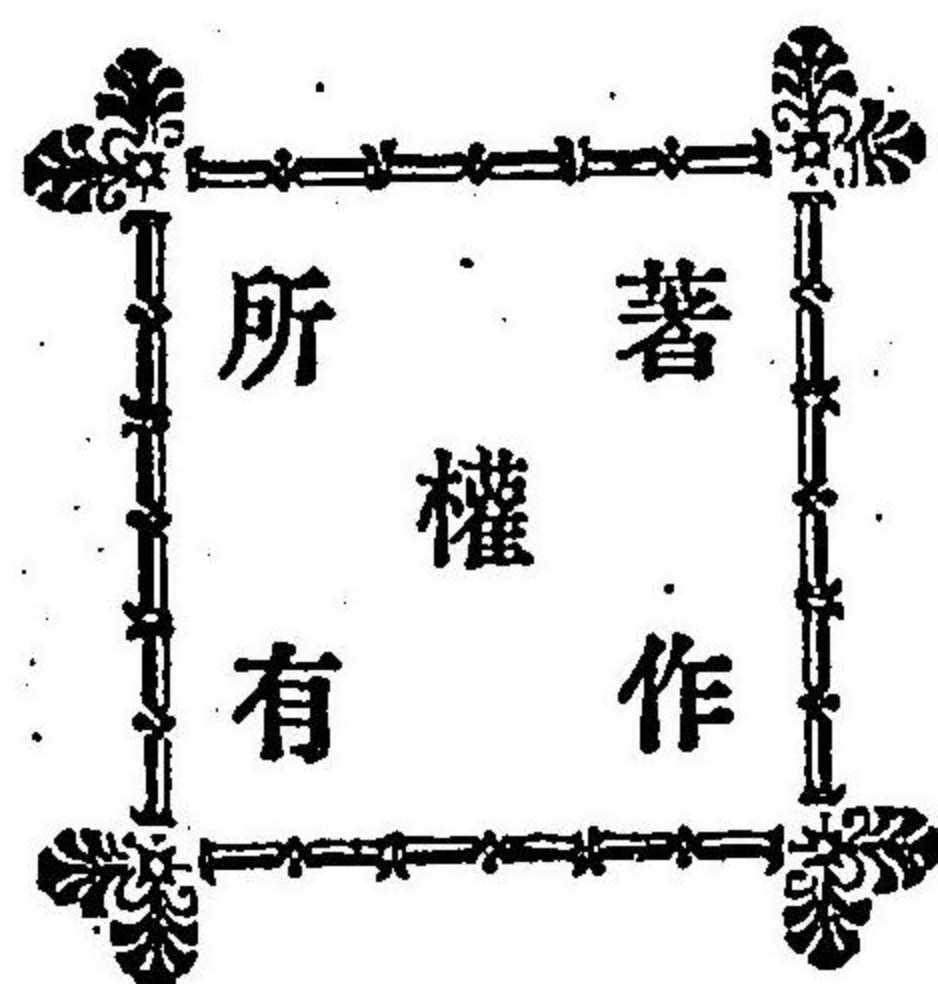
著 作 者 河 野 己 之 助

發 行 者 大 淵 涉

印 刷 者 堀 越 幸

發 行 所 駸 々 堂

電話(東)千〇七十一番



小説 玉 葛
 定價 金 四 拾 錢

大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番邸

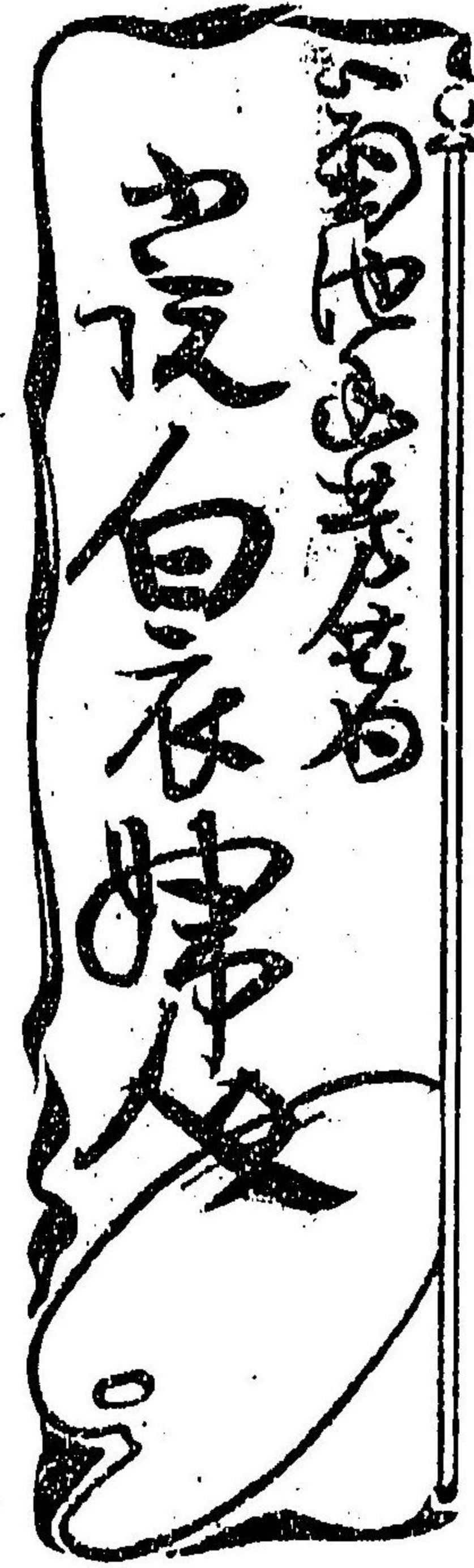
大阪市南區大寶寺町中ノ丁三百三十八番邸

大阪市南區心齋橋北詰八十六番邸

說小刊新行發堂大暇



錢五卅金價定
錢四稅郵



錢拾五金價定
錢六稅郵

說小刊新發行日一月一

說小刊新發行堂女暇



島田の女

錢四稅郵 錢十四金價定



島田の男一足

錢十四金價定 錢四稅郵



島田の女


錢五卅金價定 錢四稅郵




島田の女

錢拾四金價定 錢四稅郵

小波 浪
 著
 知照堂發行



小波 浪
 著
 知照堂發行



小波 浪
 著
 知照堂發行



定價金四拾錢 郵税金六錢 知照堂發行

小波 浪
 著
 知照堂發行



忍と勲著
 小説雄蝶雌蝶完

實價金卅錢
 郵税金六錢
 發行所 大阪心齋橋北詰 暇々堂

稻岡奴之介新作

小説美少年

發行所 大阪市南區 心齋橋北詰 暇々堂



定價金三十錢
 郵税金六錢

小説
 大正十一年
 小説
 大正十一年
 小説
 大正十一年

小説
 大正十一年
 小説
 大正十一年
 小説
 大正十一年

風之助著
荒大暗教完



實價金卅錢 郵稅六錢

發行所 大阪心齋橋北詰 暖々堂

小政
大坂
又茶屋完

正價金十三錢
郵稅六錢

新開冒子

定價金卅五錢
郵稅金六錢

野一書



根下丸

定價金卅五錢
郵稅金六錢



毎號讀切
探偵雜誌

探偵文庫

毎月一回
定日發行

探偵文は斬新奇絶なる材料を撰びて、名家獨得の筆を以て綴られしもの、一たび巻を繰れば千奇万怪、山あるかと思へば海横はり、善人善ならずして、悪人悪ならず、變幻出没、殆んど讀者が豫想の外に出づ、而して文辞の悽愴なる、亦坊間に散在する他の比にあらず、讀者若し不快なる探偵文を味はんと欲せば、去つて文庫を見よ

休裁

義紙は美術、石版、寫眞版、と新奇麗麗を凝せしもの、口物は當代第一流の名家の筆による極彩色の木版摺にて、滿版麗麗の美本なり、紙数は二百三十頁なり

定價

一冊 金貳拾五錢
拾冊 金貳圓卅錢
廿冊 金四圓卅錢
郵送料壹冊金六錢

目次

- | | | | |
|-----|--------|------|-------|
| 第一編 | 浦夜叉阿仙 | 第十一編 | 深車強盜 |
| 第二編 | 監獄の變死 | 第十二編 | 鐘山の魔王 |
| 第三編 | 華族の變死 | 第十三編 | 可憐のお園 |
| 第四編 | 暗穴地獄 | 第十四編 | 數罪の探偵 |
| 第五編 | 慘殺事件 | 第十五編 | 伊吹峠 |
| 第六編 | 西洋幽霊奇談 | 第十六編 | 二人探訪 |
| 第七編 | 晒し首 | 第十七編 | 夜及娘 |
| 第八編 | 妾の魂膽 | 第十八編 | 二人幽霊 |
| 第九編 | 秘密電報 | 第十九編 | 毒婦お花 |
| 第十編 | 盤若之面 | 第二十編 | 古茶箱 |

發行所

大阪心齋橋北詰
電話東千〇七十二番

駸々堂

探偵文庫

實價三十五錢
郵税六錢

山ある花作 鬚之巻 赤鬼青鬼

一冊 金三十五錢
郵税六錢



毎月一回定期発行 講談雑誌

新百千鳥

各冊綴切 菊版印刷本
紙数二百五十頁

正價 一冊金 参拾銭
十冊前金貳圓五拾銭
郵税 一冊六銭

東流の水、一たび返りて復た返らず、塞翁の馬上、歲月徒に過ぎて、あはれ千古の英雄も、骨朽ちてはまた十塊と擇ばず、元より青史の傳ふるありと雖、万人の料に遺せずとせば、名譽の講談師が見惑を叩いての時代物語、何ぞ一談の價値なしとせんや、なごし鹿爪らしく云ふにも當らず、本書は古往今來に於ける壯快悲絶の材料を撰んで、これを得意の舌頭に乗せ、毎月一冊を期して版に上するもの、讀んで面白いかとはお問ひなさる丈が野暮なり、勝るとにはあらねど舞臺が苦心の新百千鳥、殊に製本の美麗にして御禮料として御贈物用として、無類の好冊子、僞言と思はば、買つて見玉へ

- 第一編 大岡 菅野 彌一 郎
- 第二編 徳川十五代記上之卷
- 第三編 徳川十五代記中之卷
- 第四編 徳川十五代記下之卷
- 第五編 王政維新始末

發行所

大阪市南區心齋橋北詰
(電話東千〇七十一番)

囃々堂

大阪毎日
新聞社
あきしく編

異聞 奇話 瑣談片々

洋裝 美本
金・文・字 入
實價 金卅銭
郵送料 四銭

瑣談片々は文明國と野蠻國とを問はず東西洋と南北洋を論せず坤輿に國をなせる世界各地の風俗習慣草木氣象禽獸虫魚凡そ天地人三才に渡れる森羅萬象の奇事異聞を糾羅せるものなれば讀みて面白く語りて興あり之を繕かば不知不識の間に大いなる智識を得ると共に山の如き談話の種をその中より供給せらるべし

發行所

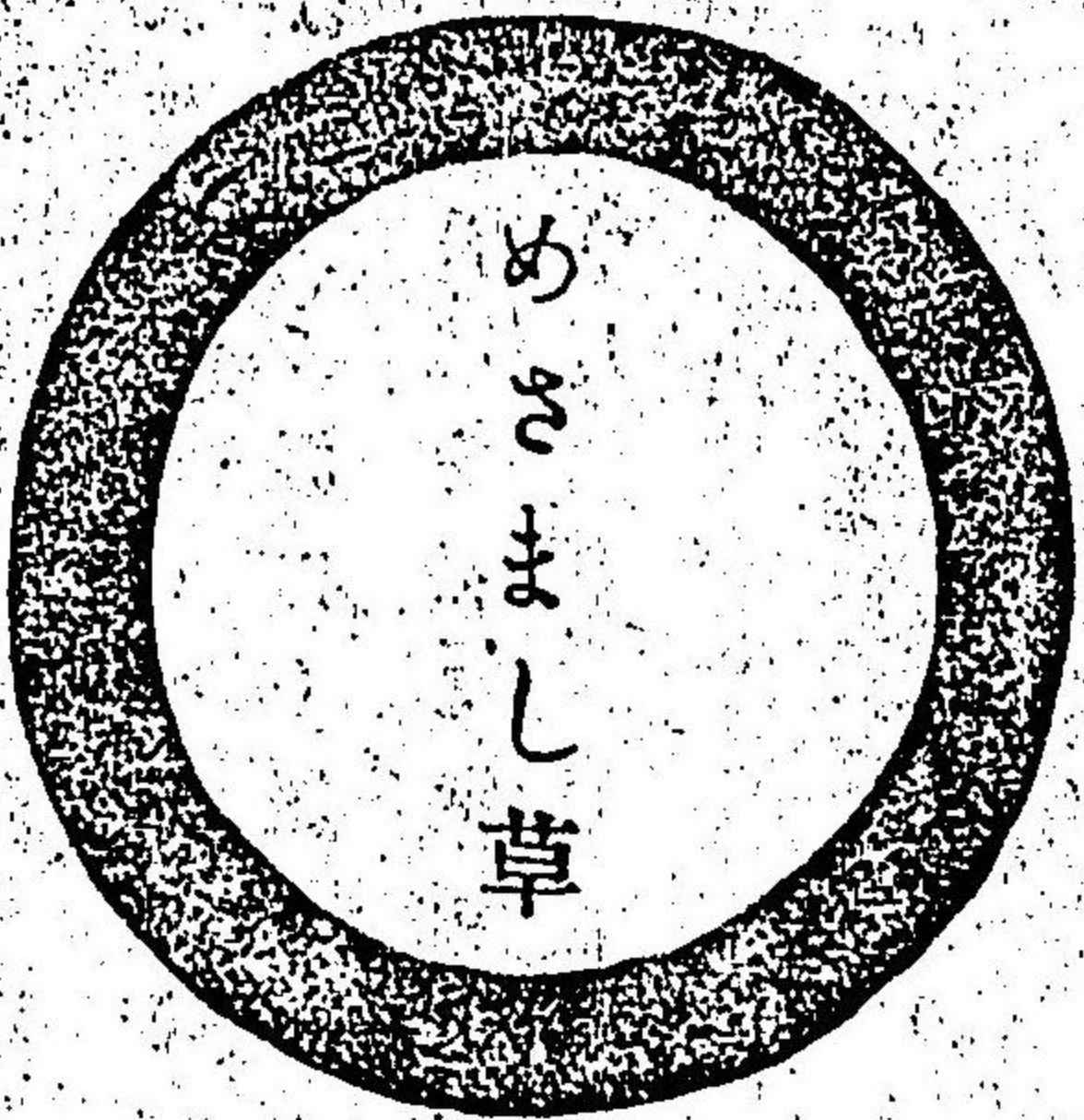
大阪心齋橋北詰八十六番邸

囃々堂

(電話東一〇七十一番)

222
306

大坂 毎日新聞 社編



菊阪半裁頗美製本

定價 金 參拾錢

市外郵稅 金 四錢

瀛車與感愛讀の諸君には

特別減價 金二十錢

本書は先頃大阪毎日新聞に連載して博く世上の好者に歡迎されたりまじ草を名もそのまゝ茲に移し植
たものです、新聞はその日々に讀棄て廢みない傾きがあつて折角の名草もほんの一時の間に過ないの
は惜いからで、要するにその面影を何時までもとめ好者をしてその樂を永遠に保たしめたい婆心に出
たものです、依て擔任記者に乞ふて冊子としました、これのみは本園に比して更に本書が聊か誇るに足
ると思ひます、

發行所

大阪心齋橋北詰八十六番邸

殿 々

与中野の端

特 8

68

函架 9-1
68

094426-000-9

特8-68

玉葛

河野 鶴浦 / 著

M35

DBQ-1936

